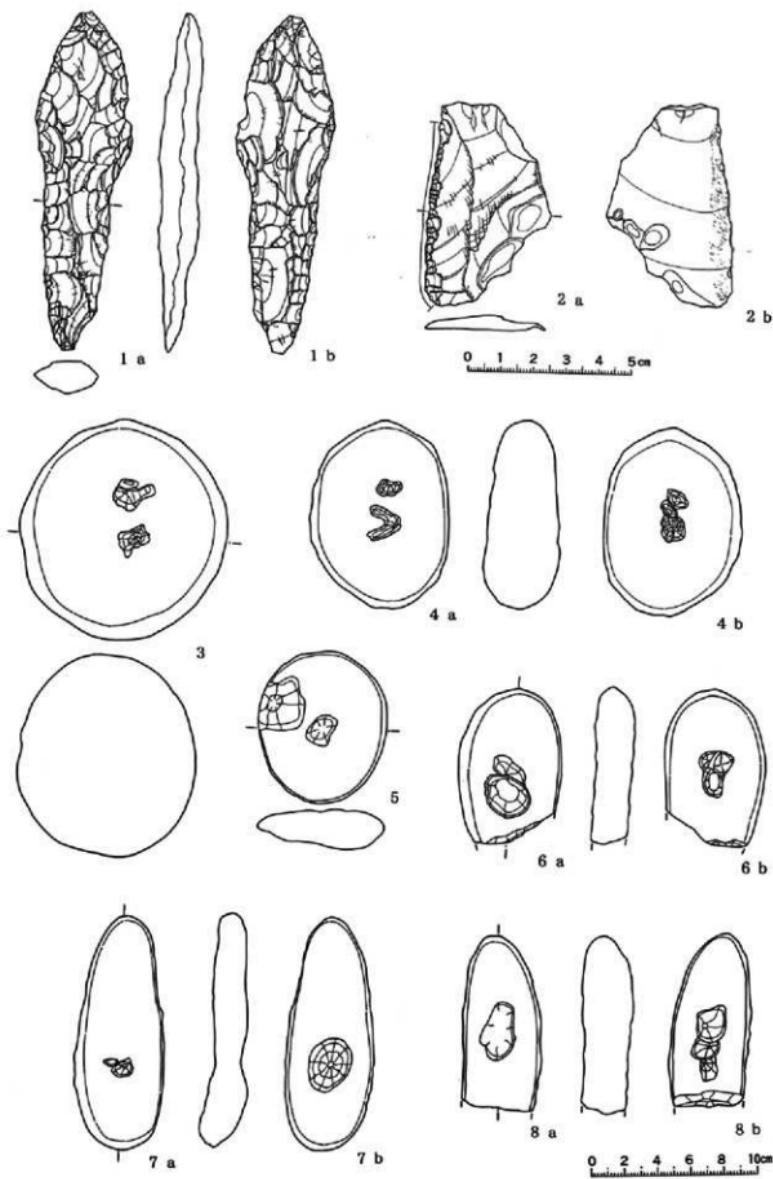


第260図 一ノ坂遺跡第VI次調査出土土器拓影・石器実測図(5)



第261図 一ノ坂遺跡第VII次調査出土土器拓影・石器実測図(6)

第31表 一ノ坂遺跡第VI次調査出土土器観察表

通し No.	出土地点 No.	出土地区	器形	体 部	施文手法	文様構成	内面調整	分 類
1	157-1 a ~ h	第2568区-	I HY14	深鉢形H	上半部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ模・ミガキ模	Ⅱ群a類
2	157-2 a ~ i	第2568区-	7 HY14	深鉢形C	上半部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ模~継+ミガキ模~継	Ⅱ群a類
3	157-3 a ~ d	第2568区-	13 HY14	深鉢形E	下側部 結束織文A		ナデ模~継+ミガキ模・斜	Ⅳ群土器
4	158回版- 4	第2568区-	2 HY14	深鉢形D	口縁部 ループB類	I a 文様帶	ナデ模+ミガキ模	Ⅰ群b類
5	158回版- 5	第2568区-	3 HY14	深鉢形	胴 部 ループB類		ナデ模~継	Ⅰ群a'類
6	158回版- 6	第2568区-	4 HY14	深鉢形	胴 部 ループB類		ナデ模+ミガキ模	Ⅰ群a'類
7	158回版- 7	第2568区-	6 HY14	深鉢形	胴 部 ループC類		ナデ模+ミガキ模	Ⅰ群a'類
8	158回版- 8	第2568区-	9 HY14	深鉢形A	口縁部 ループC類		ナデ模+ミガキ模	Ⅰ群a'類
9	158回版- 9	第2568区-	11 HY14	深鉢形	胴 部 ループA類		ナデ・ミガキ模	Ⅰ群b類
10	158回版- 10	第2568区-	12 HY14	深鉢形D	胴 部 ループB類		ナデ模+ミガキ模	Ⅰ群a'類
11	158回版- 11	第2568区-	14 HY14	深鉢形	胴 部 ループC類	I a 文様帶	ナデ模+ミガキ模・斜	Ⅰ群b類
12	158回版- 12	第2568区-	15 HY14	深鉢形	胴 部 結束織文A		ナデ模+ミガキ模	Ⅳ群土器
13	158回版- 13	第2568区-	8 HY14	深鉢形	胴 部 ループb類		ナデ模	Ⅰ群a'類
14	—	第2568区-	5 HY14	深鉢形	胴 部 複織織文		ナデ模・斜	V群土器
15	—	第2568区-	10 HY14	深鉢形	胴 部 複織織文		マメツ不明	V群土器
16	158回版- 14	第257区-	1 HY14	深鉢形A	口縁部 単筋織文A <sup>1</sup>	II b 文様帶	ナデ模+ミガキ模	Ⅱ群c類
17	158回版- 15	第257区-	2 HY14	深鉢形D	口縁部 単筋織文A <sup>1</sup>		ミガキ模	Ⅱ群a類
18	158回版- 16	第257区-	3 HY14	深鉢形D	口縁部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ模+ミガキ模	Ⅱ群a類
19	158回版- 17	第257区-	4 HY14	深鉢形D	口縁部 単筋織文A <sup>1</sup>		ミガキ模	Ⅱ群a類
20	158回版- 18	第257区-	5 HY14	深鉢形D	口縁部 単筋織文A <sup>1</sup>		マメツ不明	Ⅱ群a類
21	158回版- 19	第257区-	6 HY14	深鉢形	口縁部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ模+ミガキ模	Ⅱ群a類
22	158回版- 20	第257区-	7 HY14	深鉢形	胴 部 結束織文B		ミガキ模	Ⅳ群土器
23	158回版- 21	第257区-	8 HY14	深鉢形	胴 部 ループF類		ナデ模	Ⅰ群a'類
24	158回版- 22	第257区-	10 HY14	深鉢形	胴 部 突刺文C		ミガキ模	Ⅳ群c類
25	158回版- 23	第257区-	9 HY14	深鉢形	底辺部 突刺文C		ナデ模	Ⅳ群c類
26	158-24 a ~ d	第259区-	5 HY15	深鉢形D	口縁部 紺組織文		ナデ模+ミガキ模	Ⅳ群土器
27	159-24 e	第259区-	5 HY15	深鉢形D	口縁部 紺組織文		ナデ模+ミガキ模	Ⅳ群土器
28	159回版- 25	第259区-	6 HY15	深鉢形	胴 部 突刺文C		ナデ・ミガキ模	Ⅳ群c類
29	—	第259区-	4 HY15	深鉢形	胴 部 突刺文C		マメツ不明	Ⅳ群c類
30	159回版- 26	第259区-	7 HY15	深鉢形D	口縁部 ループC類		ミガキ模	Ⅰ群a'類
31	159回版- 27	第259区-	5 HY15	深鉢形D	口縁部 紺組織文		ナデ模+ミガキ模	V群土器
32	159回版- 28	第259区-	8 HY15	深鉢形	胴 部 ループC+疣狀文A		ミガキ模	Ⅰ群c'類
33	159回版- 29	第259区-	9 HY15	深鉢形	胴 部 ループB類		ナデ・ミガキ模	Ⅰ群a'類
34	159回版- 30	第259区-	11 HY15	深鉢形	胴 部 ループCによる羽状織文		ミガキ模	Ⅰ群a'類
35	159回版- 31	第259区-	12 HY15	深鉢形	胴 部 ループE類		ナデ模+ミガキ模~継	Ⅰ群a'類
36	159回版- 32	第259区-	13 HY15	深鉢形C	口縁部 ループC類		ナデ模~継+ミガキ模~継	Ⅰ群a'類
37	159回版- 33	第259区-	14 HY15	深鉢形	胴 部 ループC・E類		ミガキ模~継	Ⅰ群a'類
38	159回版- 34	第259区-	15 HY15	深鉢形	胴 部 ループB類		ナデ模・ミガキ模	Ⅰ群a'類
39	159回版- 35	第259区-	17 HY15	深鉢形	胴 部 結束織文A		ナデ模	Ⅳ群土器
40	159回版- 36	第260区-	4 HY15	深鉢形	胴 部 結束織文B		ナデ模	Ⅳ群土器
41	159-37 a ~ h	第259区-	16 HY15	深鉢形	胴 部 複組織文		ナデ模~継	V群土器
42	160回版- 38	第260区-	1 HY15	深鉢形	胴 部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ模・斜	Ⅱ群a類
43	160回版- 39	第260区-	2 HY15	深鉢形	胴 部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ・ミガキ模	Ⅱ群a類
44	160回版- 40	第259区-	10 グリット	深鉢形	胴 部 ループB類		ナデ・ミガキ模	Ⅰ群a'類
45	160回版- 41	第260区-	15 グリット	深鉢形	胴 部 単筋織文A <sup>1</sup>		ナデ模	Ⅱ群a類
46	160回版- 42	第260区-	5 HY15	深鉢形	底辺部 竹管文D		ナデ模~継	Ⅳ群b類
47	160回版- 43	—	グリット	深鉢形	胴 部 ループC類		ナデ模	Ⅰ群a'類

通し No.	団版No.	拝団No.	出土地区	器形	体 部	施文手法	文様構成	内面調整	分類
45	160回版- 44	第260回- 12	グリット	深鉢形	胴 部	単節織文A <sup>2</sup>		ナデ横	II群a類
49	160回版- 45	第260回- 13	グリット	深鉢形	胴 部	ループE類		ナデ横	I群a'類
50	160回版- 46	—	グリット	深鉢形	胴 部	ループB類		ナデ横	I群a'類
51	160回版- 47	第260回- 14	グリット	深鉢形	胴 部	ループF類		ミガキ横	I群a'類
52	160回版- 48	第260回- 11	グリット	深鉢形	胴 部	単節織文A <sup>2</sup>		ナデ横+ミガキ紙	II群a類
53	160回版- 49	第260回- 10	グリット	深鉢形	口縁部	突例文B		ナデ横	誰群c類
54	160回版- 50	第260回- 3	HY15	深鉢形	胴 部	単節織文A <sup>2</sup>		ナデ・ミガキ紙	II群a類
55	160回版- 51	第260回- 16	グリット	深鉢形	胴 部	複節織文		ナデ横+縫	V群土器
56	160回版- 52	—	グリット	深鉢形	胴 部	結束織文A		ナデ横	V群土器
57	160回版- 53	第260回- 17	グリット	深鉢形	胴 部	複節織文		ナデ横+縫	V群土器

### 第32表一ノ板遺跡第VI次調査出土石器計測観察表

#### I群石器【石縫】

通し 番号	通物No.	回 番 号	拝団番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	細 細	判別調整	備 考
1	B Z -	第1632版- 29	—	HY14	f	0.71	4.57	0.84	9.3	珪質頁岩	I A群-I b類	II a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り

#### I群石器【石縫】

通し 番号	通物No.	回 番 号	拝団番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	細 細	判別調整	備 考
2	B Z - 11	第162回版- 19	—	HY14	f	0.00	6.73	2.76	106.0	珪質頁岩	I A群-I b類	I + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
3	B Z - 12	第163回版- 26	—	HY14	f	0.24	4.89	1.42	37.6	珪質頁岩	I A群-I b類	I + I - Tb + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
4	B Z - 15	第163回版- 40	—	HY14	f	0.12	4.88	1.75	48.6	珪質頁岩	I A群-V b類	I - II a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
5	B Z -	第163回版- 30	第260回- 18	B レンチ	f	5.62	2.79	0.70	18.1	珪質頁岩	I A群-V a類	I - II a b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
6	B Z -	第161回版- 5	—	HY14	f	0.06	2.29	0.73	4.2	珪質頁岩	I A群-V b類	I - II a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
7	B Z - 14	第163回版- 38	—	HY14	f	0.35	3.95	0.95	17.0	珪質頁岩	I A群-V b類	I - II a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
8	B Z -	第141回版- 11	—	HY15	f	7.43	3.58	1.14	38.0	珪質頁岩	II B群-I b類	I + R <sup>2-3</sup>	未完成品
9	B Z -	第163回版- 17	—	HY14	f	0.18	5.24	1.29	68.0	珪質頁岩	II B群-I b類	I a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
10	B Z -	第162回版- 20	—	HY15	f	0.05	6.15	0.20	58.0	珪質頁岩	II B群-I b類	I - II a + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
11	B Z -	第162回版- 22	—	HY15	f	0.15	5.84	1.01	28.6	珪質頁岩	II B群-I b類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
12	B Z -	第161回版- 12	第258回- 4	HY14	f	7.96	4.35	2.24	54.5	珪質頁岩	II B群-II b類	I - II a + R <sup>2-3</sup>	未完成品
13	B Z -	第163回版- 28	—	HY14	f	0.16	7.48	2.15	51.5	珪質頁岩	II B群-II b類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
14	B Z -	第163回版- 24	—	HY14	f	0.74	(7.15)	1.90	90.9	珪質頁岩	II B群-V b類	I a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
15	B Z - 6	第161回版- 7	第257回- 19	HY14	f	5.38	2.78	0.81	10.8	珪質頁岩	II B群-X a類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
16	B Z - 13	第162回版- 15	—	HY14	f	7.30	3.34	1.20	28.0	珪質頁岩	II B群-X a類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
17	B Z -	第162回版- 23	第258回- 2	HY14	f	5.28	4.33	0.96	19.0	珪質頁岩	II B群-X a類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
18	B Z - 5	第164回版- 4	第257回- 17	HY14	f	0.33	2.56	0.42	6.2	珪質頁岩	II C群-X b類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
19	B Z - 2	第161回版- 2	第260回- 7	HY15	f	5.86	2.10	0.37	6.2	珪質頁岩	II D群-X a類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	使用痕有り
20	B Z - 12	第161回版- 3	第257回- 18	HY14	f	5.95	1.58	0.45	4.5	珪質頁岩	II E群-X d類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	使用痕有り
21	B Z - 8	第141回版- 1	第251回- 16	HY14	f	6.70	2.92	0.40	8.6	珪質頁岩	II E群-X e類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	使用痕有り
22	B Z -	第162回版- 25	—	HY14	f	0.30	4.33	0.90	9.4	珪質頁岩	II C群-II b類	I - II a + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
23	B Z -	第163回版- 27	—	HY14	f	0.34	5.62	0.52	9.7	珪質頁岩	II C群-II b類	I a b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り
24	B Z -	第162回版- 23	—	HY14	f	6.55	4.15	0.88	19.4	珪質頁岩	II C群-II a類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
25	B Z -	第162回版- 18	—	HY15	f	6.70	4.08	1.00	19.4	珪質頁岩	II C群-II a類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
26	B Z - 9	第161回版- 8	第257回- 13	HY14	f	5.18	2.90	0.70	10.0	珪質頁岩	II C群-V a類	I - II a b + R <sup>2-3</sup>	未完成品
27	B Z -	第161回版- 6	第258回- 3	HY14	f	14.80	3.20	0.48	7.2	珪質頁岩	II C群-V b類	I - II b + R <sup>2-3</sup>	破損面有り

## Ⅶ群石器〔石鋸〕

遺物番号	遺物名	出 収 番 号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	種類	測量箇所	備考	
28	B Z 3	第160回版- 32	第25790- 15	H Y14	f	0.06	2.82	1.46	29.8	珪質頁岩	斜削- 鋸a類	I・II・a・b・d?	未完成品
29	B Z 1	第160回版- 33	第25790- 11	H Y14	f	7.70	2.98	1.08	21.4	珪質頁岩	斜削- K a類	I・II・a・b・d?	未完成品
30	B Z 2	第160回版- 31	第26180- 1	測量調査区	II	10.12	2.95	1.16	38.2	珪質頁岩	斜削- K a類	I・II・a・b・d?	未完成品

## Ⅷ群石器〔石錐〕

遺物番号	遺物名	出 収 番 号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	種類	測量箇所	備考	
31	B Z 2	第160回版- 36	第25790- 14	H Y14	f	3.75	2.15	0.68	4.2	珪質頁岩	V部- a類	I・II・b・d?	
32	B Z 7	第160回版- 9	第25790- 7	H Y14	f	5.78	2.00	0.70	9.2	珪質頁岩	V部- b類	II・III・b・d?	
33	B Z 16	第160回版- 29	第25790- 12	H Y14	f	2.97	1.23	0.44	1.8	珪質頁岩	V部- c類	I・II・a・b・d?	

## Ⅸ群石器〔石鎌〕

遺物番号	遺物名	出 収 番 号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	種類	測量箇所	備考	
34	B Z 2	第160回版- 37	第25800- 1	H Y14	f	6.24	4.87	1.38	44.2	珪質頁岩	V部- a類	I・II・a・b・d?	万字再生
35	B Z 4	第160回版- 34	第25800- 8	H Y15	f	5.50	4.12	2.32	55.0	珪質頁岩	V部- a類	I・II・a・b・d?	万字再生
36	B Z 2	第160回版- 35	_____	H Y15	f	6.70	3.05	2.18	35.4	珪質頁岩	V部- a類	I・II・a・b・d?	未完成
37	B Z 2	第160回版- 15	_____	H Y15	f	3.96	2.88	0.67	8.1	珪質頁岩	V部- f類	I・II・a・b・d?	

## Ⅹ群石器〔櫛器〕

遺物番号	遺物名	出 収 番 号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	種類	測量箇所	備考	
38	B Z 2	第160回版- 13	_____	H Y15	f	7.40	5.31	2.00	79.0	珪質頁岩	櫛群- a類	I・II・b・d?	未完成
39	B Z 2	第160回版- 14	第26000- 6	H Y15	f	6.32	5.36	1.62	55.0	珪質頁岩	櫛群- a類	I・II・b・d?	未完成
40	B Z 2	第160回版- 10	第26180- 2	B トレンチ	II	6.10	3.80	0.58	15.2	珪質頁岩	櫛群- b類	1 b + d?	使用痕あり

第33表 一ノ坂遺跡第VI次調査出土器物分類計測表

遺物番号	遺物名	出土地区	種類	層位	分類	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	測量番号	備考
1	408A	H Y14	磨石	1F	1B+II A+C1	10.5	7.4	3.5	410	閃綠片岩	第25900- 1	
2	408B	H Y14	磨石	2F	1B+II C+C3	(10.5)	6.3	3.4	300	砂岩	第25800- 9	
3	406A	H Y14	磨石	2F	1B+II A+C5	12.5	5.3	3.8	380	安山岩	第25900- 3	
4	411	H Y14	磨石	1F	1A+II A+D'1	10.3	7.8	5.9	720	泥岩	第25900- 2	
5	413	H Y14	磨石	1F	1B+II A+D'1	11.4	7.7	5.3	680	閃綠片岩	第25900- 8	
6	409A	H Y15	磨石	1F	1B+II A+C1	10.6	7.3	6.2	690	砂岩	第26000- 9	
7	421	GSI-87	磨石	2F	1B+II D+C1	9.2	(7.9)	2.2	250	砂岩	第26180- 5	
8	381	GSI-87	磨石	2F	1B+II A+C2	14.0	5.2	2.7	210	安山岩	第26180- 7	
9	338	GSI-87	磨石	2F	1B+II A+C3	(10.6)	4.8	2.9	210	砂岩	第26180- 8	欠損面有り
10	339	GSI-87	磨石	2F	1A+II A+C5	13.0	11.5	10.2	200	安山岩	第26180- 3	
11	301	GSI-87	磨石	2F	1B+II A+C7	(9.6)	6.1	2.6	200	安山岩	第26180- 6	欠損面有り
12	402A	B-T	磨石	2F	1A+II A+C8	11.0	8.3	4.6	560	安山岩	第26180- 4	

## 第6節 第VII次調査

### I 調査の経過『第262図』

今回の調査区は、第I次調査区（大型堅穴住居跡）の南東側にあたり、河岸段丘上の直下に位置している。今回の調査の目的は、第VI次調査で確認した連房月堅穴住居跡の全体像を検出することにある。調査は、平成2年度から4年度に実施した発掘調査箇所を含めてた範囲を対象とし、第IV次・第V次調査の下層面で、調査面積は約800m<sup>2</sup>であった。

調査は平成5年（1993）4月15日から開始した。最初に昨年度に埋め戻した箇所の表度剥離を開始する。

第VI次調査では、隣接した5棟の堅穴住居跡を確認しており、HY18まで登録している。精査をすすめたところ、昨年とは異なる展開を見せたのが、HY17とHY18の存在である。当初は、長方形の細長い堅穴住居跡と考えていたHY17は精査した結果、ほぼ方形プランの2棟と判明した。

今回の調査はプラン確認に重点をおき、床面まで掘り下げたのは1棟だけである。昨年はHY14を掘り下げていることから関連するHY17を掘り下げることにし、掘り下げには約1週間を要した。

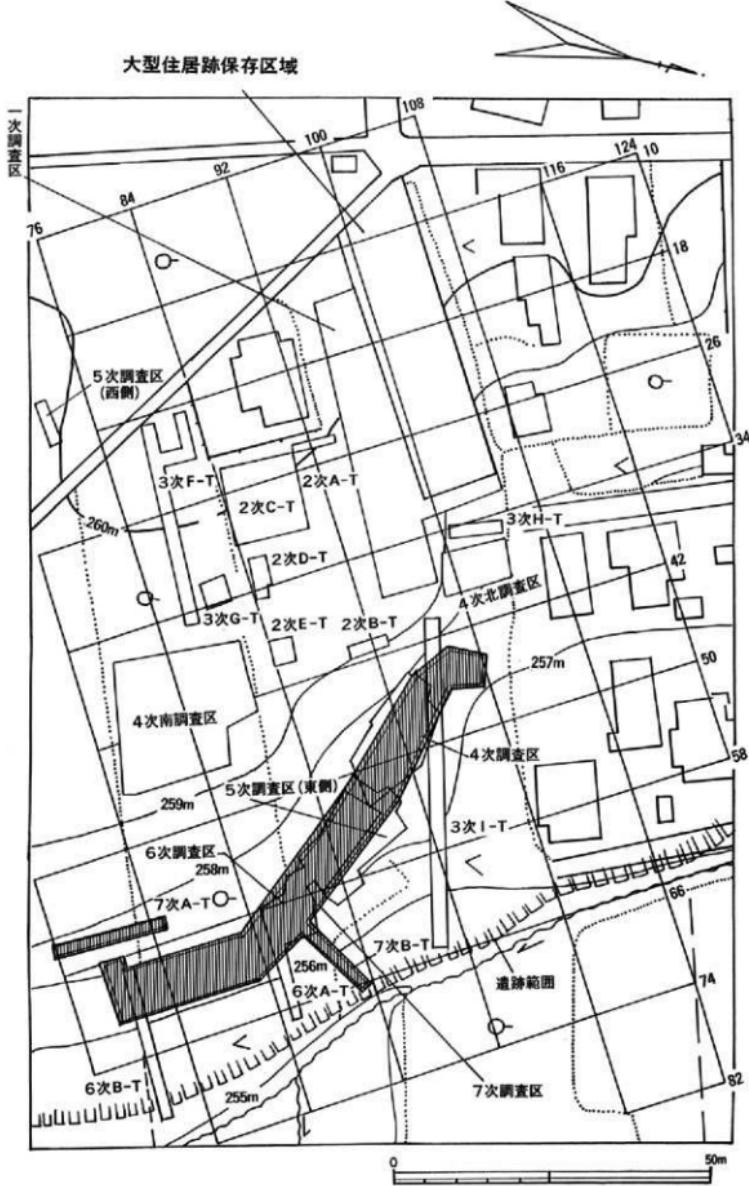
その後トレンチを北側と東側に配し、地山まで掘り下げた。同年6月7日には上空から、写真撮影を行い、終了後は遺構群の実測図作成に着手する。

同年6月10日には文化庁の岡村道雄氏が来訪され、掘り下げは1棟に留めるようにとの指導で、他は現況のまま埋戻すことに決定した。同年6月15日までに遺構の実測図を終了し、同年6月16日午前10時に現地説明会を行った。

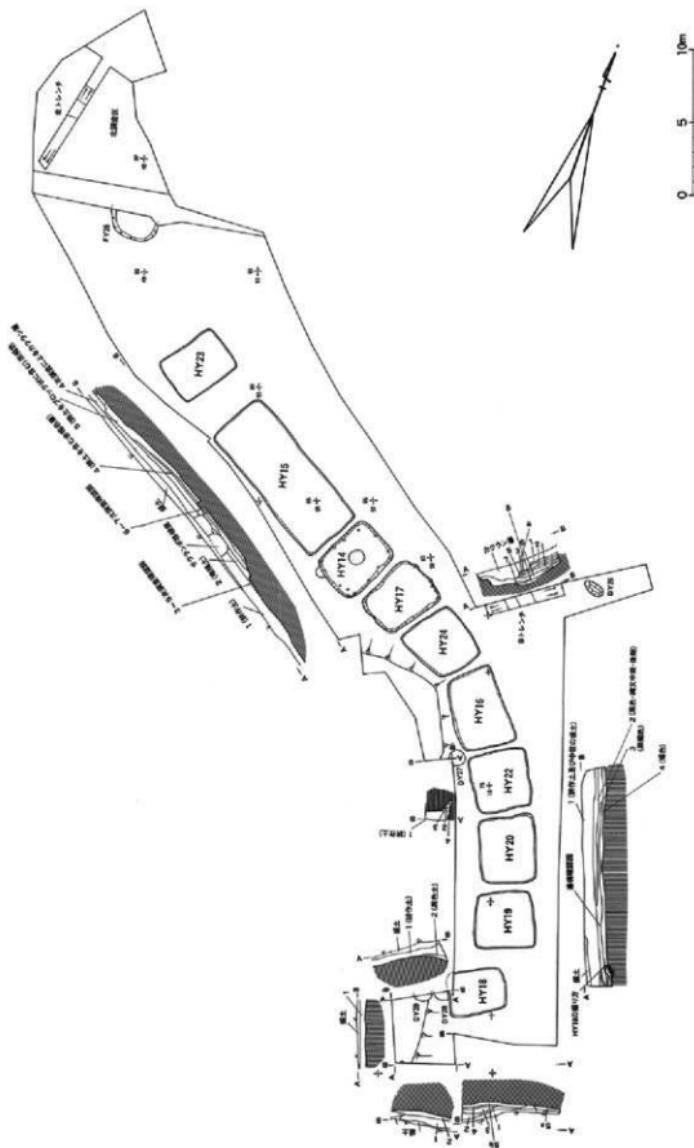
現地説明会終了後の午後から、埋め戻しを開始する。埋め戻しに際し、将来のことを考えて遺構確認面には石灰を散布した。同年6月19日で第VII次調査を終了した。

### II 検出された遺構『第263図』

今回の調査で検出した遺構は、堅穴住居跡HY19、20、22、23、24の5棟と土壙DY26～DY29の4基、風倒木壙のFY25の1基であった。HY16、18は第VI次調査でプランの一部を確認している。また、第VI次調査でHY17と登録した堅穴住居跡は今回の精査で2棟であることが判明し、南側をHY24と呼ぶことにした。北トレンチ周辺に確認したHY21は、精査の結果自然の落ち込みであり、HY21は欠番とした。



第262図 一ノ坂遺跡第Ⅰ次～第Ⅶ次調査グリッド配図



第263図 一ノ板遺跡第百次調査構全体図

### 1) 壓穴住居跡『第263図』

壓穴住居跡群は段丘直下の地山を掘り込んで構築されているのが特徴で、覆土の上層部には円形状の焼土を含み、平面形状は方形及び長方形形状を呈している。壓穴住居跡群は隣接して存在することから、「連房型壓穴住居跡」と命名した。ここでは、第VI次調査で確認した壓穴住居HY14~18の5棟も含めて北から順に説明したい。

#### ・ HY23『第263図』

長径4.6m、短径3.4mを測り、やや離れて存在する壓穴住居跡である。「連房型壓穴住居跡」の中には加わらないものと想定される。ただし、埋土状況や構築面から判断すれば同時期と考えられる。

#### 〈出土遺物〉

遺物は確認面の埋土より第272図-9の石匙失敗品1点と剥片14点、土器片8点が認められている。

#### ・ HY15『第263図』

HY23と2.6m離れて構築されている。HY15・HY14・HY17・HY24・HY16・HY22・HY20・HY19の8棟が「連房型壓穴住居跡」に加わるものとみられる。全長は約49mに達する。HY15は最も長い住居跡であり、幅3.4m、長さは11mを測る。

#### 〈出土遺物〉

確認面からは石鎌2点、石匙7点、石銛4点等の分類石器が15点と剥189点の204点の石器、土器片79の計283点が検出されている。土器片は、ループ文を主体にしたI群土器が圧倒的に多く、他にII群・VIII群土器が含まれている。

遺物の出土量としては、床面まで掘下げたHY17を除き、最も多い壓穴住居跡である。

#### ・ HY14『第263図』

第VI次調査で床面まで掘り下げた壓穴住居跡である。詳細は第VI次調査の中で述べているので割愛するが、今回の調査でも、再度埋め戻した土を除去した。全体の写真を撮影する目的のためである。取りはずすことなく埋戻したセクションベルトより、石籠状石器が出土している。

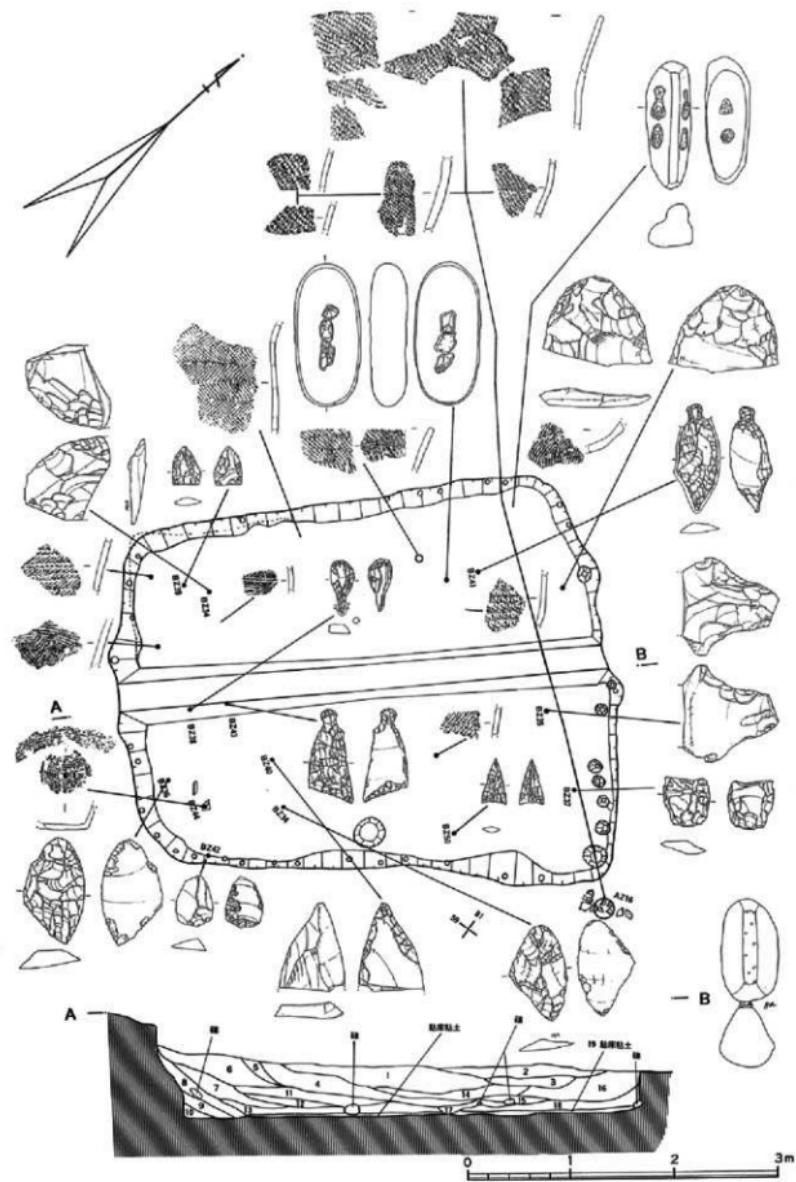
#### ・ HY17『第263図』

#### 〈平面形状〉

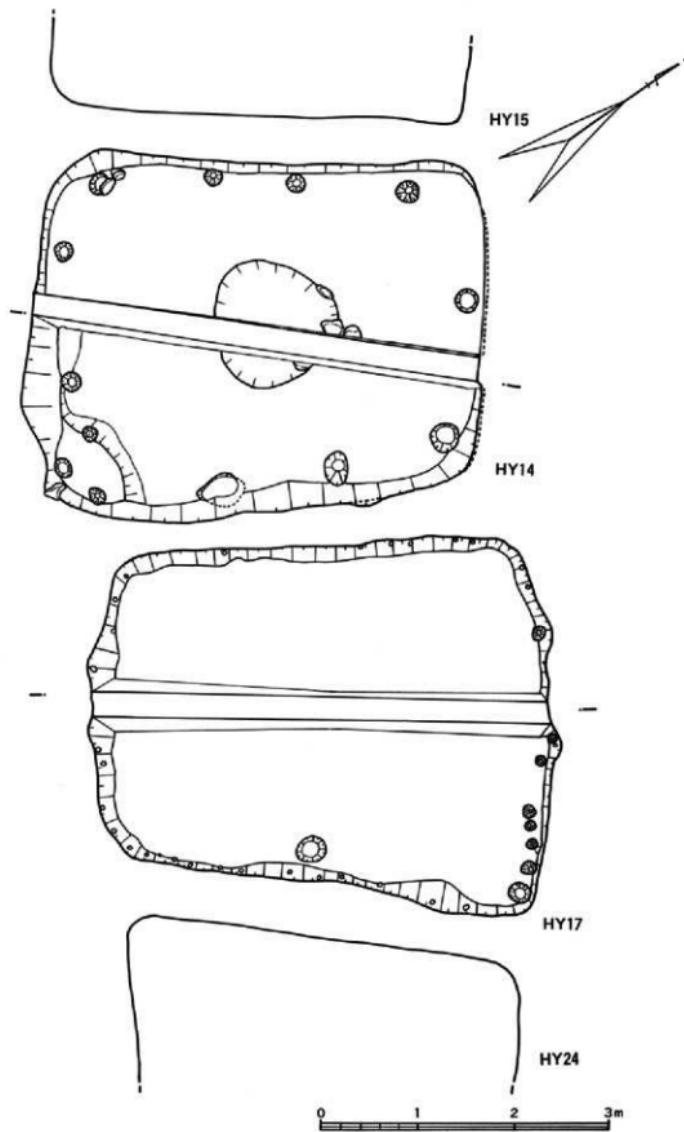
今回の調査で床面まで掘り下げた壓穴住居である。壁面の確認は竹箸を用い慎重に進め壁面に斜状に掘られた小柱穴を確認することができた。

平面形状は、東方がやや幅広くなる不整方形形状を呈し、東西4.77m、南北は西側で3.15m、東側では3.88mを測る。

#### 〈壁の状況〉



第264図 一ノ坂遺跡第17次調査HY17平面図



第265図 一ノ坂遺跡第Ⅶ次調査HY14・HY17平面図

壁の深さは斜面を掘り込んでいることから、段丘側が深く65cm東方部は40cmを測る。HY17が構築されている層は疊が多い箇所であり、床面には粘土で部分的に貼床を施しているのが認められた。床面は平坦である。炉は認められなかった。

#### 〈覆土の状況〉

埋土は19枚に分けられ、東西から交互に意図的に埋められたものである。土質は地山層に近い砂利層と粘土質のシルト層で多量の疊を含んでいる。

#### 〈柱穴跡〉

壁中央部には平均5cm位のピットが約45度の角度で28箇所認められた。東側を除き20~50cmの間隔で全周する。深さは10~20cmであった。柱穴の深さは、南東コーナー部が最も深く45cm、他は8~10cmと浅い。東側中央部の2本の柱穴は壁に突き刺さるように掘りこまれ、間隔が1.3mあることから入口と想定される。

#### 〈検出遺物〉

遺物は258点検出されている。特に石器は、第269図15~17の石鎌、第269図19・20の石匙、第270図1・4の石匙未完成品等の分類石器が13点、他に剥片138点が出土している。疊器としては凹石2点がある。土器は107点で単節縄文のⅡ群土器と複節縄文のV群土器を中心としている。

#### • HY24『第263図』

HY17とは南側を境に40cm、HY16とは北を境に30cmと隣接して構築された堅穴住居跡であり、段丘下の地形に沿って掘り込んでいるため、南部の幅が意図的に狭くした形態が特徴である。南側が長径で4.3m、東西の北方部は4m、南方部は3.3mを測る。ボーリング探査によるとHY17と同様な壁の深さを有するものと想定される。

#### 〈出土遺物〉

確認面より、剥片6点と土器片7点の形13点が認められた。土器は、ループ文のI群土器、単節縄文のⅡ群土器、平行沈線と刺突文を構成するⅧ群土器の文様を施す土器片が各1点と磨減を有する4点がある。

#### • HY16『第263図』

HY22の北側に30cm離れて構築した堅穴住居跡で、平面形状が示す様にHY24の縁辺に合わせるように掘り込まれている。南北が長径で5.75m、北方部は3m、南方部は3.7mを測る。

#### 〈出土遺物〉

遺物は欠損面を有する石鎌の失敗品第268図46と47が出土している。他に剥片8点があるが、土器片は認められなかった。

#### • HY22〔第4図〕

セクション図で示すように、遺構の確認面上部には約1mの埋土（中世）があり、ほぼ完全な状況でプランを確認できた。ボーリング探査では、床面までは約70cmを測る。南方のHY20、19、18も同様な壁の深さを示す。住居の埋土の中央部にかけて円形状の焼土が分布している。平面形は方形を呈し、4mを測る。HY20とは32cm離れて掘り込んでいる。

#### 〈出土遺物〉

遺物は第272図5の石匙1点と、剥片31点、凹石2点、土器は結束縄文の第VII群土器、刺突文の第III群土器等17点の計49点が確認面より出土している。

#### ・ HY20 [第4図]

平面形状は南北が4.6m、東西4mを有する方形を呈し、HY22と縁辺が同一方向で接している。

#### 〈出土遺物〉

遺物は第271図-9の両面加工の石匙失敗器1点を含め、凹石2点、剥片1点と土器片1の計5点が確認面から認められている。

#### ・ HY19 [第4図]

HY20と縁辺が僅かにずれて構築している。平面形状は正方プランを示し一辺が4.1mを測る堅穴住居であり、連房式堅穴住居を形成する住居跡の南端部に位置するものである。

#### 〈出土遺物〉

磨滅した土器片2点が確認面より認められている。

#### ・ HY18 [第4図]

第VI次調査でトレンチを東西に配した箇所である。一連の連房を形成する堅穴住居群より、西南方向に2m離れて構築され、今回の調査区では最南端に位置する。平面形状は東西に主軸長を有する長方形プランの示し、東西4m、南北3mを測る。

#### 〈出土遺物〉

遺物は剥片3点とループ文を施した第I群土器片3点の計6点が確認面より出土している。

## 2) その他の遺構

#### ・ FY25 [第4図]

セクションの埋土状況から判断して、風倒木坑と考えられる。覆土内からは総数46点の遺物が検出された。石器は第272図11の石錐、第267図4の石匙、第272図12の搔の3点の分類石器と剥片24点、凹石2点も出土している。土器は17点で、ループ文を施したI群土器と単節縄文のII群土器を主体にしている。

#### DY26 [第4図]

橢円形の平面形状を呈し、長径1.75m、深さは90cmを測る。埋土状況は自然堆積状況で、8枚に分けられる。埋土には少量の炭化物を含み、赤黒褐土で竪穴住居跡と同様な土色であることから、竪穴住居群と同時期とみられる。平面形態や深さ等の吟味よりトイレ跡、または落し穴と推測される。遺物はフレーク1点だけであった。

・D Y27、28、29〔第4図〕

いずれも、斜面に掘り込まれた土壤群であり、直径が1m前後の円形プランを示している。今回の調査では掘り下げは実施しなかったが、ボーリング探査の感触では、第Ⅲ次調査で確認されたDY1～DY3の墓壙群と類似する。

今回のDY27～29の土壤群も段丘斜面に分布するなどの共通性から考えると段丘の東側縁片を対象に墓壙群が配置されている可能性が指摘される。

・河川状遺構

HY24の東方に配した東トレンチの中央部に帯状の土色変化が認められたことから1m幅のBトレンチを配して掘り下げた結果、幅7m、深さ2mの溝が確認されている。この溝は、今回の北トレンチ内でも認められており、さらに第Ⅲ次のIトレンチ、第Ⅵ次のA・Bトレンチからも同様な遺構が検出されている。覆土は8枚で暗黒褐色と底面部は泥炭質となっており、住居跡の確認面となる黒褐色土層の面に認められることや覆土の状況が類似する点などから考えると住居跡の構築以前から溝は存在し、集落とともに共存していたと想定される。遺物は剥片が底面より2点検出した以外は認められなかった。全体的に総合すれば、帯状に配されている住居跡群の直ぐ東側を区画するかのように10m～15m前後の幅で蛇行しながら南側より、東側を経由して西側方向に進んでいたものとみられる。

・北調査区〔第13図〕

段丘が緩やかにカーブする箇所である。当初は確認面に土色変化が認められたので、HY21命名し精査したが、進行するに従い、包含層であることが判明した。第3次、第4次調査箇所でも、遺構は発見されておらず、平成元年度の第1次調査で発見した大型竪穴住居跡と、「連房型竪穴住居跡」の中間地点は遺構の存在しない空間地帯と考えられる。ここでの自然落ち込みからは、総数で225点の遺物が検出されている。石器としては、石鏃4点、石匙3点、石匙未完成品2点等の分類石器15点と剥片121点、凹石5点、磨石5点の計146点の石器が出土し、土器片は79点で、ループ文の第I群土器と単節繩文の第II群土器が多くみられた。

・東トレンチ〔第4図〕

地形の形成を確認する目的でHY24の東方に配した。現況の表土から地山までの最深箇所で1.75mを測る。トレンチ掘り下げの結果、黒褐色土を掘り込んで竪穴住居跡を構築していることが判明した。本遺跡の黒褐色土は繩文前期初頭以前に形成された土層である。

## II 検出された遺物

第VI次調査区から出土した遺物は、総数1,545点で、これらの遺物を大別すると、土器及び石器に分けられる。以下に細別して述べたい。

### 1) 出土土器の分類

今回の調査で出土した土器は、堅穴住居跡の確認面を中心に224点、土壇等の遺構が17点、トレンチ内が37点、北調査区等の遺構外が214点の計455点が認められている。ここでは、文様の判別される81点を選別して以下、第I次調査に従って簡単に説明を加える。

### 2) 出土土器の分類

第VI次調査出土の土器には次の6群、10類が含まれる。

〈I群土器〉 ループ文を地文として構成するもの。

- ・ I群 a 1類=ループ文を全面に施すもの。

『第266図-5~11・15~25, 第269図-2・3, 第271図-3第272図-7・14, 第274図-13・15』

- ・ I群 a 2類=ループ文を羽状に施すもの。

『第272図-6』

- ・ I群 b 類=ループ文を地文とし、無文帶の区画文様を構成するもの。

『第266図-12~14』

- ・ I群 c 1類=ループ文を地文とし、沈線文を主体に文様を構成するもの。

『第271図-6』

- ・ I群 c 2類=ループ文を地文とし、コンバス文を主体に文様を構成するもの。

『第266図-4第272図-17』

- ・ I群 d 類=ループ文を地文とし、竹管文を主体に文様を構成するもの。

『第266図-2・3, 第272図-20』

- ・ I群 e 類=ループ文を地文とし、突刺文を主体に文様を構成するもの。

『第266図-2』

〈II群土器〉 単節繩文を地文として構成するもの。

- ・ II群 a 類=単節繩文を全面に施すもの。

『第266図-29・31~34, 第269図-5・7・9・10・13, 第269図-1012, 第272図-15・16・

18・19, 第274図-10~12・14・16, 175図版-49』

〈IV群土器〉 無節繩文を地文として構成するもの。

『第266図-30, 第271図-2』

〈V群土器〉 複節繩文を地文として構成するもの。

『第269図-6・8、第269図-11、第271図-7』

〈VI群土器〉 結束繩文を地文として構成するもの。

『第266図-26~28、第269図-4、第271図-4・5、第272図-4・13』

〈VII群土器〉 土器の部分片を一括したもので、沈線文・突刺文・竹管文等で文様を構成するものを本群とした。この中には地文を有するものも含まれるものと考えられる。

・VII群b類=竹管文を主体としたもの。

『第269図-1、第272図-3、第274図-9』

・VII群c類=突刺文を主体としたもの。

『第266図-35~37、第271図-8、第272図-8』

以上、出土土器の詳細は下記の第34表を参照。

### 3) 出土石器

今回の調査で出土した石器は、堅穴住居跡の確認面を中心に601点、土壌等の遺構が32点、トレンチ内が165点、北調査区等の遺構外が292点の計1,090点が認められている。

### 4) 出土石器の分類

分類石器は、I群石器9点、II群石器31点、III群石器2点、IV群石器7点、V群石器1点、VI群石器1点、VII群石器8点、X群石器1点の、合計62点が出土した。VIII群石器・IX群石器の出土はなし。これらの石器について、58点を作図した。分類・細別については第I次調査に準じ「第35表一ノ坂遺跡第VII次調査出土石器計測観察表」を作成した。

#### 〈I群石器〉

石鏃に分類したもので、完成石器が4点認められる。4点とも「一ノ坂技法」による形態を有する。薄型剥片を素材とする石鏃3点は、全て未完成である。

#### 〈II群石器〉

石匙に分類したもので、完成石器は6点認められる。本群は3形態に大別され、IIA群が3点、IIB群が22点、IIC群が6点であった。IIA群は両面調整の形態である。IIB群の形態は、完成石匙でも大半を占める。IIC群は6点中2点が完成石匙である。

#### 〈III群石器〉

両尖匕首に分類したもので、2点とも製作途上の失敗品であり、破損面を有する形態である。初期段階の失敗で、第II段階、第III段階に細類した。

#### 〈IV群石器〉

石錐に分類したもので、2点の完成石錐は、両者とも欠損した形態を有する。第267図10は、基部が欠損した形態であり、尖端部に使用痕が観察される。同図9は、尖状部欠損の形態である。他の5点は未完成の形態を呈する。

〈V群石器〉

石錐に分類したもので、簡単な調整で整形した石錐であり、V群b類に細類した。

〈VI群石器〉

石錐に分類したもので、両面調整で整形した形態であり、VI群f類に細類した。

〈VII群石器〉

搔器に分類したもので、VII群a類が3点、VII群b類が5点の2形態が出土。

〈X群石器〉

石製品に分類したものでDY27の上面からX群C類に細類した形態が1点出土している。DY27は斜面に構築された土壙で、完掘はしていない。刃部欠損。

5) 碓 器

凹石6点、磨石1点の合計7点出土。住居跡からの出土で占められる。

## N 要 約

今回の調査は、第Ⅲ次～第Ⅵ次範囲も含め、連房式竪穴住居跡の全面確認に主眼をおいたもので、9棟の竪穴住居跡が確認されている。その中で、連房式竪穴住居跡に加わるものは、HY18を除く8棟で、段丘に沿ってやや湾直気味に配置されている。北側のHY23はやや離れているが、次のHY15は全長11mを測り、母屋的な主要住居と推測される。長軸に対する幅は、いずれも3.5mと一定し、全長は49mをなしている。

大きさでは、平成元年に確認された43.5mの大型住居跡を超えるもので、おそらくは、壁を境に部屋が独立し、屋根をもって同一の建物としていたものと予想される。

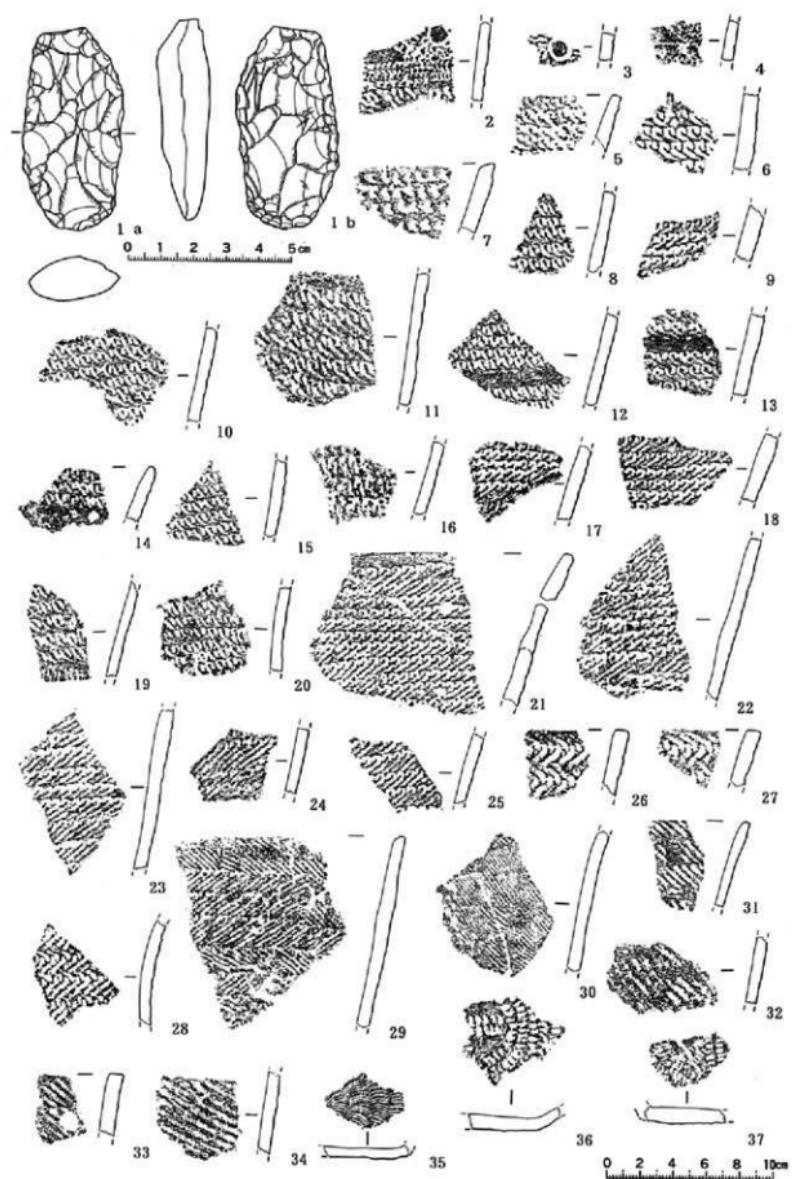
出土遺物も従来の住居跡と同様に少なく、特別の工房跡的な存在ではなく、共有住居跡とみたい。

ここでは、これまで確認された住居跡を整理しながら連房式竪穴住居跡の意義について考えてみたい。

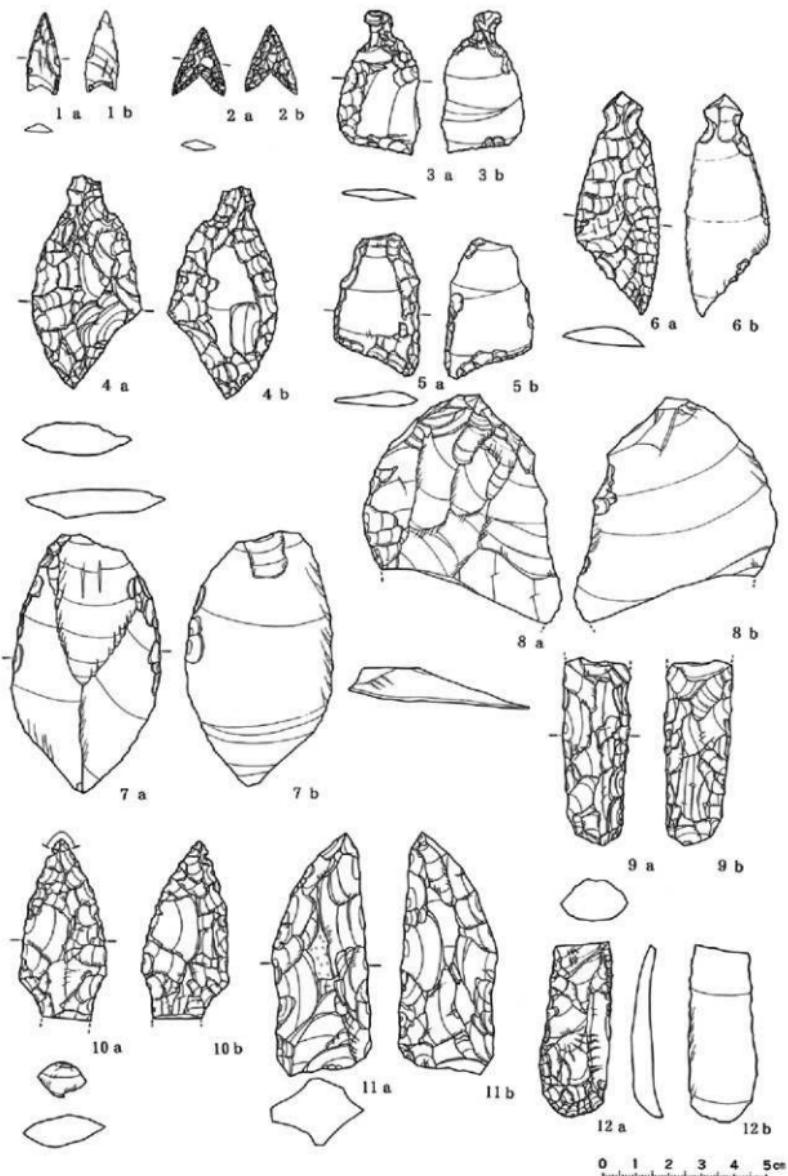
連房式竪穴住居跡は、出土した土器や確認層位の吟味から石器工房跡となる大型住居とは、ほぼ同時に機能したものと推測する。

それが、何らかの理由（1. 湿気、排水＝機能的な理由。2. 個人の尊重＝精神的な理由など。）で意図的に廃棄され、埋め戻してから整地して1期～4期までの竪穴住居跡を構築したと解釈したい。

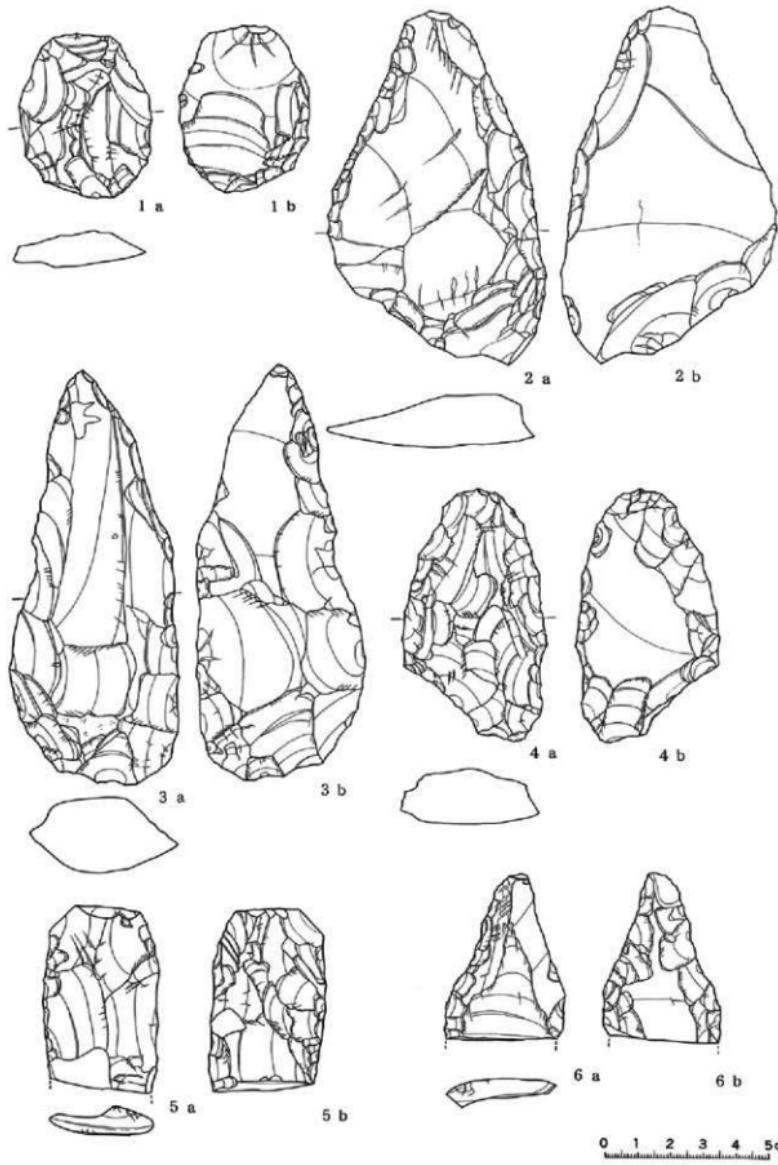
ただし、石器工房となる大型住居跡には立替えは認められないことで、構造的にどれだけ耐久性があるかの問題も残る。



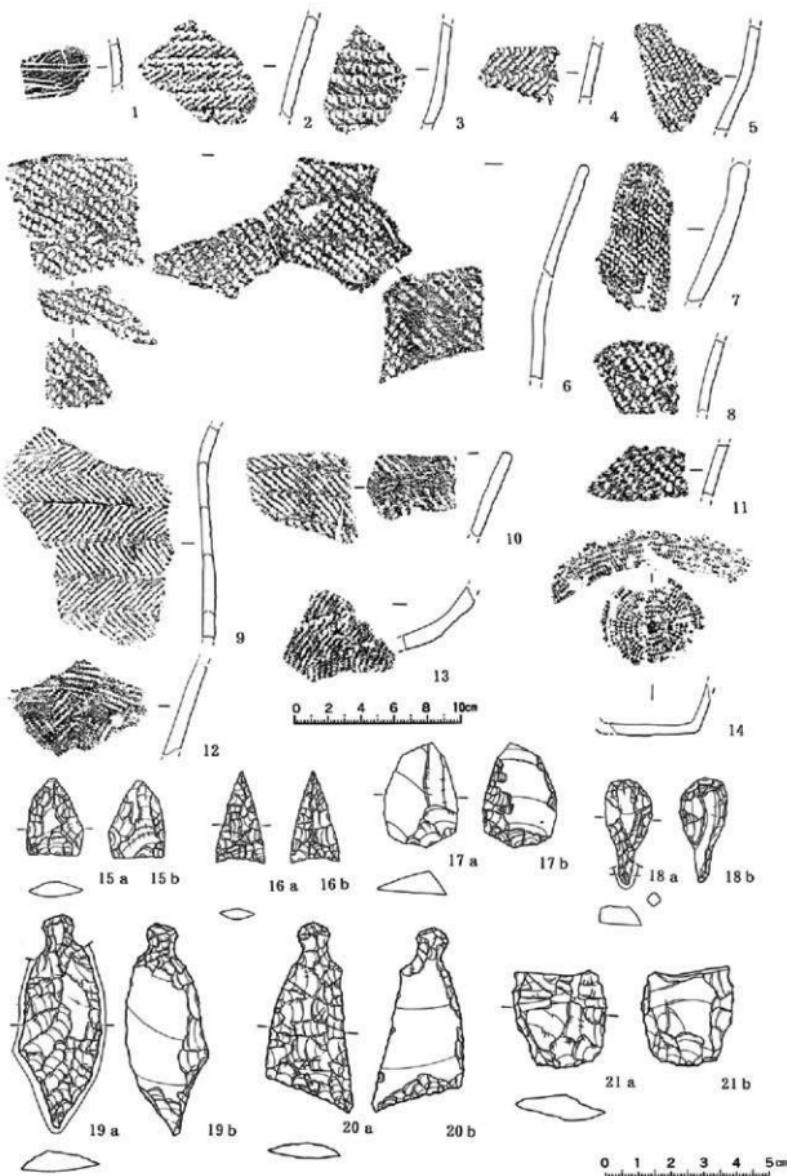
第266図 一ノ板遺跡第1次調査出土土器拓影・石器実測図(1)



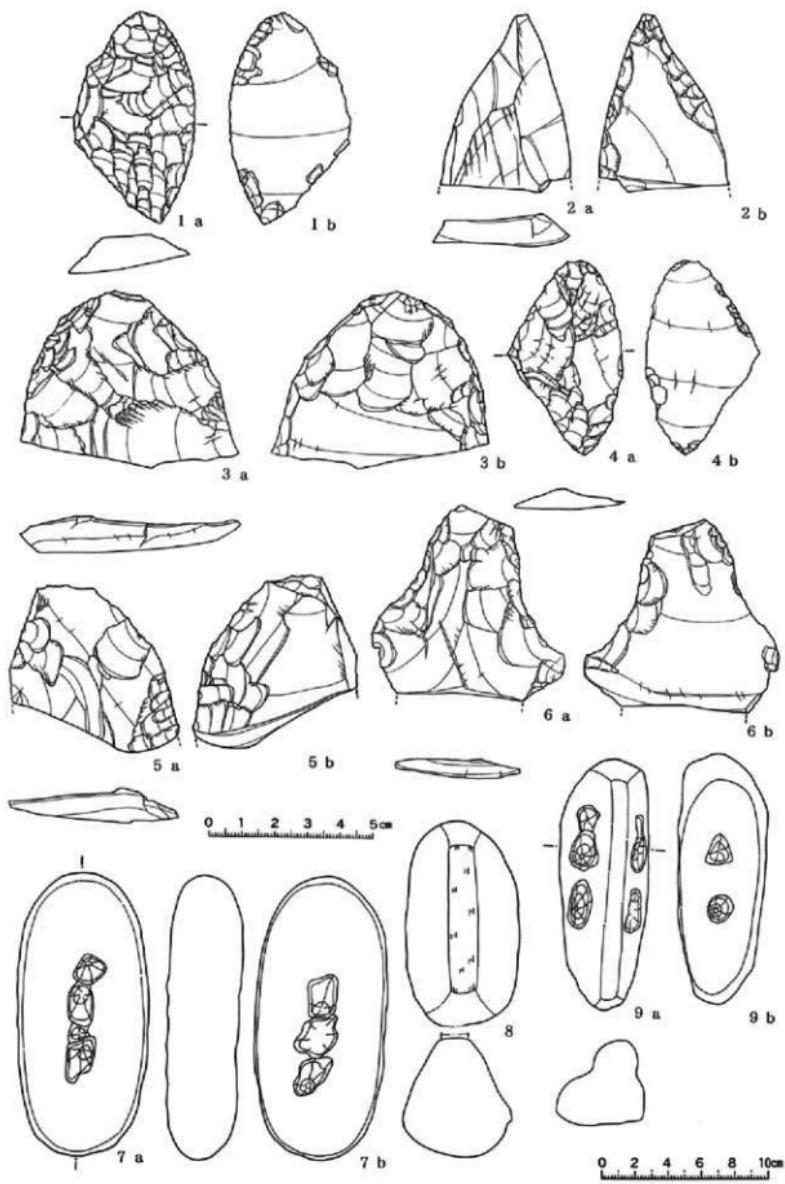
第267図 一ノ坂遺跡第二次調査出土土器拓影・石器実測図(2)



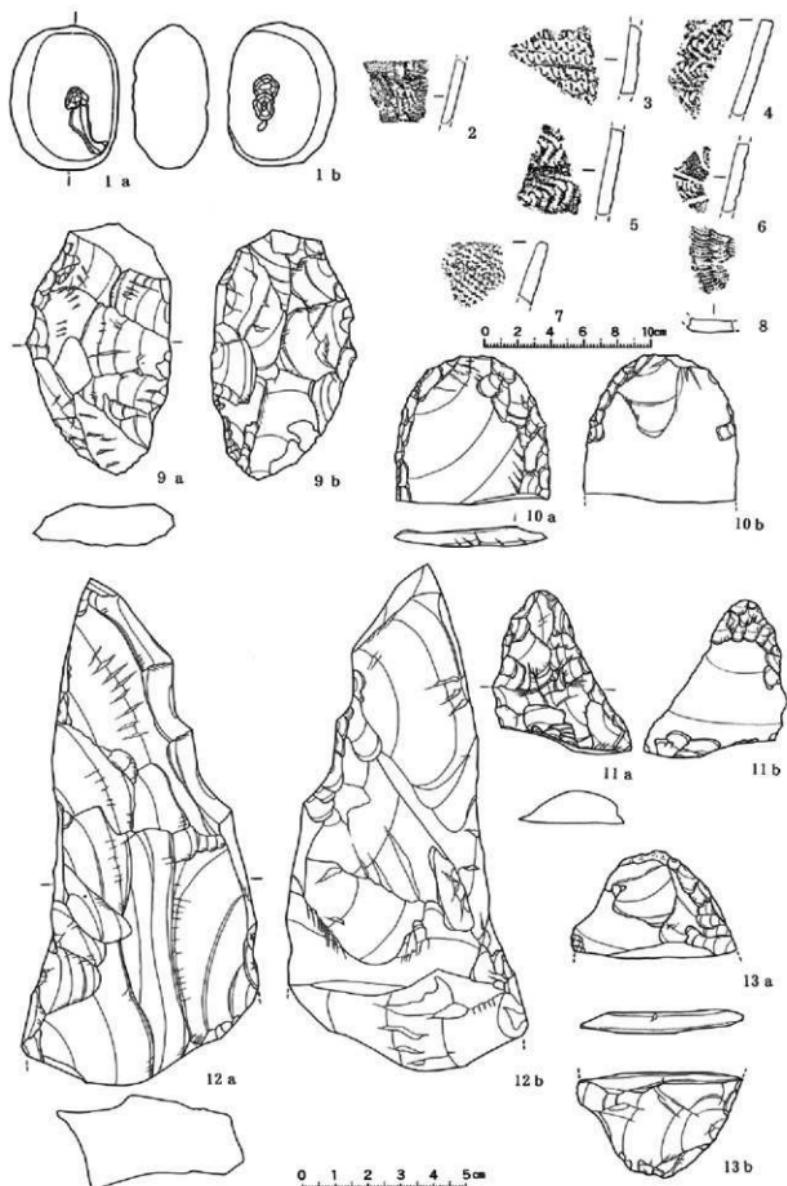
第268図 一ノ坂遺跡第Ⅳ次調査出土土器拓影・石器実測図(3)



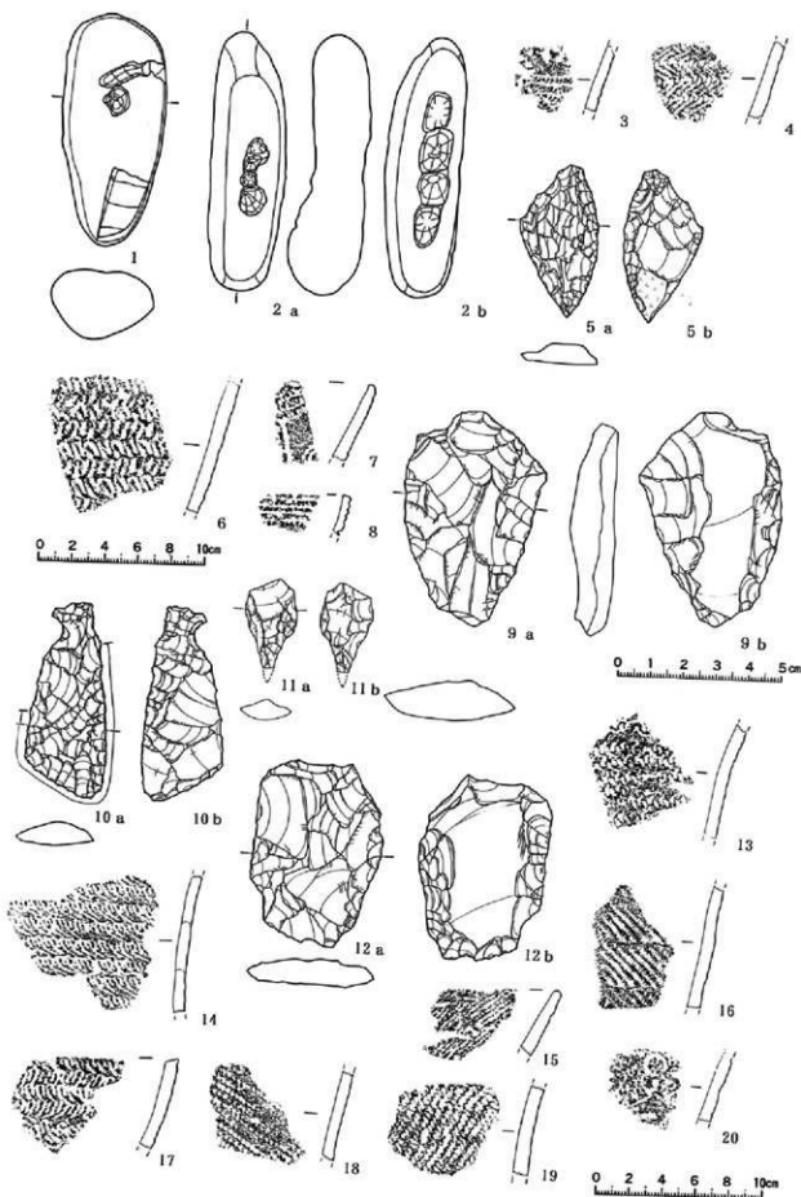
第269図 一ノ坂遺跡第Ⅶ次調査出土土器拓影・石器実測図(4)



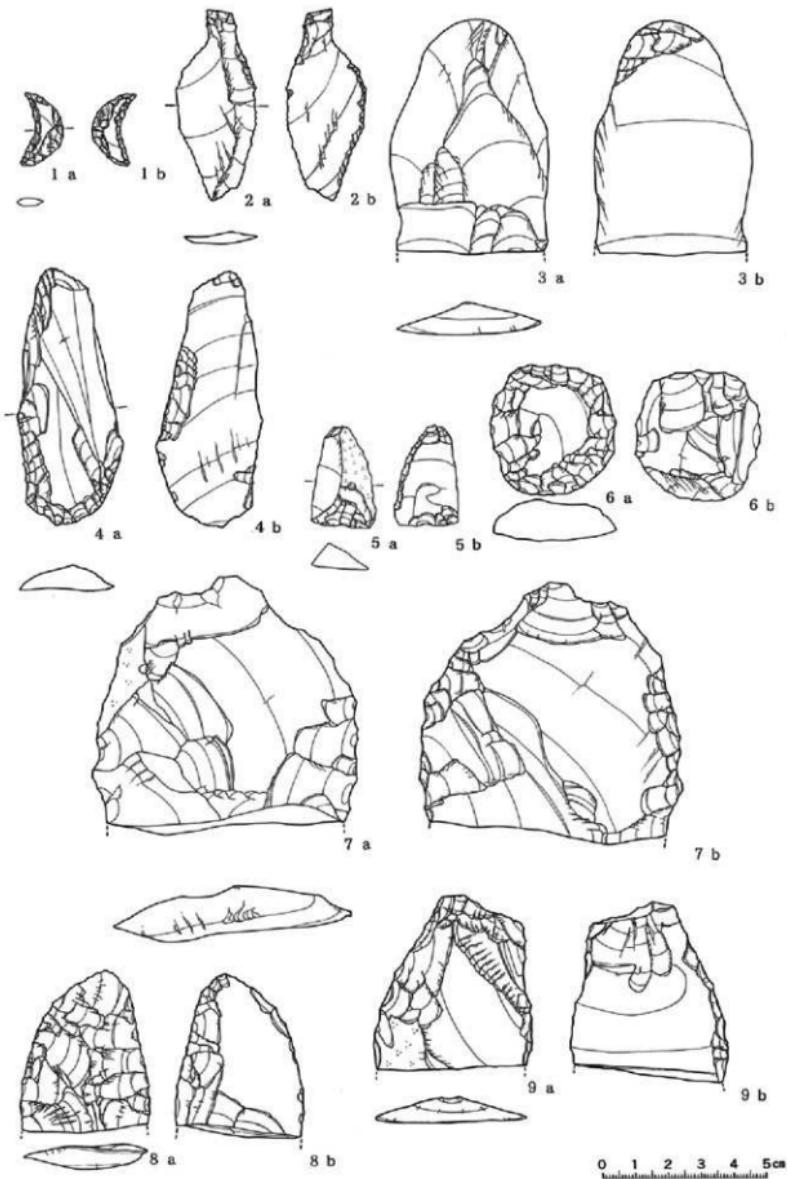
第270図 一ノ坂遺跡第Ⅵ次調査出土土器拓影・石器実測図(5)



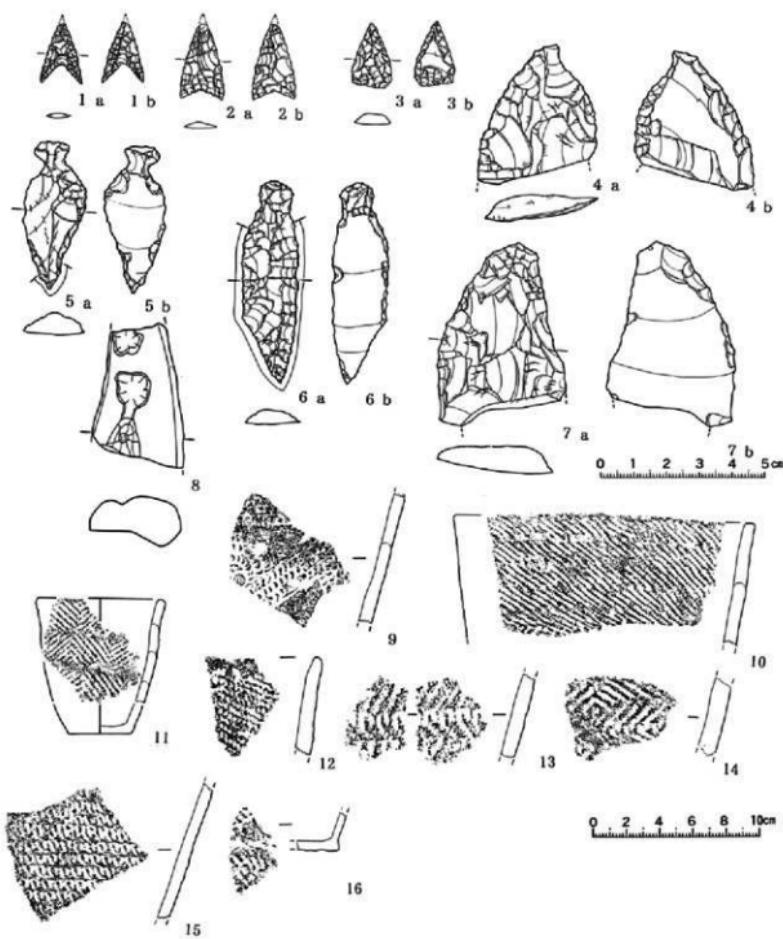
第271図 一ノ板遺跡第Ⅱ次調査出土土器拓影・石器実測図(6)



第272図 一ノ坂遺跡第1次調査出土土器拓影・石器実測図(7)



第273図 一ノ坂遺跡第Ⅲ次・査出土土器拓影・石器実測図(8)



第274図 一ノ坂遺跡第Ⅶ次調査出土土器拓影・石器実測図(9)

第34表 一ノ坂遺跡第Ⅶ次調査出土土器観察表

通し No.	図版No.	件名No.	出土地区	器形	体 部	施文手法	文様模成	内面調整	分 類
1	1730版- 1	第2668- 2	HY15	深鉢形	胴 部	ループC型+竹管文A+尖削文	CXB1文様帯	ナデ模・斜	I群d・e
2	1730版- 2	第2668- 4	HY15	深鉢形	胴 部	ループA型+疣状文A		ミガキ模	I群c'類
3	1730版- 3	第2668- 6	HY15	深鉢形	胴 部	ループC型		ナデ模	I群a'類
4	1730版- 4	第2668- 8	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模・斜	I群a'類
5	1730版- 5	第2668- 3	HY15	深鉢形	胴 部	ループC型+竹管文A		ミガキ模	I群d類
6	1730版- 6	第2668- 5	HY15	深鉢形	口縁部	ループC型		ナデ模	I群a'類
7	1730版- 7	第2668- 10	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
8	1730版- 8	第2668- 11	HY15	深鉢形	胴 部	ループC型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
9	1730版- 9	第2668- 9	HY15	深鉢形	胴 部	ループC型		ナデ模	I群a'類
10	1730版- 10	第2668- 13	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型	I a 文様帯	ナデ模	I群b類
11	1730版- 11	第2668- 14	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		マメジ不明	I群b類
12	1730版- 12	第2668- 15	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
13	1730版- 13	第2668- 12	HY15	深鉢形	胴 部	ループA型	I a 文様帯	ナデ模+ミガキ模	I群b類
14	1730版- 14	第2668- 19	HY15	深鉢形	下脚部	ループB型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
15	1730版- 15	第2668- 17	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模	I群a'類
16	1730版- 16	第2668- 18	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
17	1730版- 17	第2668- 16	HY15	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
18	1730版- 18	第2668- 20	HY15	深鉢形	胴 部	ループA型		ナデ模	I群a'類
19	1730版- 19	第2668- 23	HY15	深鉢形	胴 部	ループE型		ミガキ模・斜	I群a'類
20	1730版- 20	第2668- 24	HY15	深鉢形	胴 部	ループE型		ナデ模	I群a'類
21	1730版- 21	第2668- 25	HY15	深鉢形	胴 部	ループD型		ナデ模	I群a'類
22	1730版- 22	第2668- 22	HY15	深鉢形	胴 部	ループD・E型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
23	1730版- 23	第2668- 28	HY15	深鉢形	D 口縁部	結束繩文A		ナデ模	複群土器
24	1730版- 24	第2668- 27	HY15	深鉢形	D 口縁部	結束繩文A		ナデ模	複群土器
25	1740版- 25	第2668- 21	HY15	深鉢形	D 口縁部	ループD・E型		ナデ模+ミガキ模	I群a'類
26	1740版- 26	第2668- 28	HY15	深鉢形	胴 部	結束繩文B		ナデ模	複群土器
27	1740版- 27	第2668- 31	HY15	深鉢形 I	口縁部	単節繩文A <sup>2</sup>		ナデ模	Ⅲ群a 類
28	1740版- 28	第2668- 29	HY15	深鉢形 II	口縁部	単節繩文B <sup>2</sup>		ナデ模・斜	Ⅲ群a 類
29	1740版- 29	第2668- 30	HY15	深鉢形	胴上部	無節繩文		ナデ・ミガキ模	複群土器
30	1740版- 30	第2668- 32	HY15	深鉢形	胴 部	単節繩文A <sup>2</sup>		ナデ・ミガキ模	Ⅲ群a 類
31	1740版- 31	第2668- 34	HY15	深鉢形	胴 部	単節繩文A <sup>2</sup>		ナデ模+ミガキ模	Ⅲ群a 類
32	1740版- 32	第2668- 33	HY15	深鉢形 I	口縁部	単節繩文A <sup>2</sup>		ナデ模	Ⅲ群a 類
33	1740版- 33	第2668- 35	HY15	深鉢形	底 部	尖削文B			複群 c 類
34	1740版- 34	第2668- 36	HY15	深鉢形	底 部	尖削文C			複群 c 類
35	1740版- 35	第2668- 37	HY15	深鉢形	底 部	尖削文B			複群 c 類
36	1740版- 36	第2668- 1	HY17	深鉢形	胴 部	竹管文B		ナデ模	複群 b 類
37	1740版- 37	第2668- 2	HY17	深鉢形	胴 部	ループE型		ナデ模	I群a'類
38	1740版- 38	第2668- 3	HY17	深鉢形	胴 部	ループB型		ナデ模・斜	I群a'類
39	1740版- 39	第2668- 4	HY17	深鉢形	胴 部	結束繩文A		ナデ・ミガキ模	複群土器
40	1740版- 40	第2668- 5	HY17	深鉢形	胴 部	単節繩文A <sup>2</sup>		ナデ模+ミガキ模	Ⅲ群a 類

通し 名	図版No.	標本No.	生土地区	骨形	体 無	施文手法	文様構成	内面調整	分類
41	174-41 a b	第26985- 6	HY17	深鉢形D	上半部	複施縦文		ナデ横+ミガキ縦	V群土器
42	175-41 c i	第26985- 6	HY17	深鉢形D	上半部	複施縦文		ナデ横+ミガキ縦	V群土器
43	175回版- 42	第26985- 7	HY17	深鉢形	下側部	単施縦文A <sup>1</sup>		ミガキ横	II群 a類
44	175回版- 43	第26985- 8	HY17	深鉢形	胴 部	複施縦文		ナデ横+ミガキ縦	V群土器
45	175回版- 44	第26985- 10	HY17	深鉢形F	口縁部	單施縦文A <sup>2</sup>		ナデ横+ミガキ縦	II群 a類
46	175回版- 45	第26985- 13	HY17	深鉢形	底辺部	単施縦文A <sup>1</sup>		ナデ縦+ミガキ横~縦	II群 a類
47	175回版- 46	第26985- 9	HY17	深鉢形	胴 部	単施縦文B <sup>2</sup>		ナデ横~縦+ミガキ横~縦	II群 a類
48	175回版- 47 a	第26985- 10	HY17	深鉢形F	口縁部	単施縦文A <sup>2</sup>		ナデ横+ミガキ縦	II群 a類
49	175回版- 47 b	第26985- 11	HY17	深鉢形	胴 部	複施縦文		ナデ横+ミガキ縦	V群土器
50	——	第26985- 12	HY17	深鉢形	下側部	単施縦文A <sup>1</sup>		ナデ横・斜	II群 a類
51	175回版- 48	第26985- 14	HY17	深鉢形	底 部	突起文C		ナデ・ミガキ横	III群 c類
52	175回版- 49	——	HY17	深鉢形	胴 部	単施縦文A <sup>2</sup>		ナデ横	II群 a類
53	175回版- 51	第27185- 2	HY18	深鉢形	胴 部	無施縦文		ナデ横	V群土器
54	175回版- 51	第27185- 3	HY21	深鉢形	胴 部	ループB類		ナデ横・斜	I群 a'類
55	175回版- 52	第27185- 4	HY21	深鉢形D	口縁部	結束縦文B		ナデ横+ミガキ縦	V群土器
56	175回版- 53	第27185- 5	HY21	深鉢形	胴 部	結束縦文B		ナデ横	V群土器
57	175回版- 54	第27185- 7	HY21	深鉢形	口縁部	複施縦文		ミガキ横	V群土器
58	175回版- 55	第27285- 3	HY22	深鉢形	胴 部	竹管文B		ナデ横	III群 b類
59	175回版- 56	第27285- 4	HY22	深鉢形	胴 部	結束縦文B		ナデ横+ミガキ縦	V群土器
60	175回版- 57	第27285- 6	HY23	深鉢形	胴 部	ループC類による羽状圖文		ミガキ・ナデ横	I群 a'類
61	175回版- 58	第27185- 6	HY21	深鉢形	胴 部	ループB類+沈底文B		ミガキ横	I群 c'類
62	175回版- 59	第27185- 8	HY21	深鉢形	底 部	突起文C		ミガキ横	III群 c類
63	175回版- 60	第27285- 7	HY23	深鉢形 I	口縁部	ループB類+沈底文B		ナデ・ミガキ横	I群 a'類
64	175回版- 61	第27285- 8	HY23	深鉢形	口縁部	突起文D		ナデ・ミガキ横	III群 c類
65	176回版- 62	第27285- 14	グリット	深鉢形	胴 部	ループD類		ナデ・ミガキ横	I群 a'類
66	176回版- 63	第27285- 17	グリット	深鉢形 A	口縁部	ループC類による羽状圖文		ナデ横+ミガキ縦	I群 c'類
67	176回版- 64	第27285- 15	グリット	深鉢形 I	口縁部	単施縦文A <sup>1</sup>		マメツ不明	II群 a類
68	176回版- 65	第27285- 13	グリット	深鉢形	胴 部	結束縦文A		ナデ横+ミガキ縦	III群土器
69	176回版- 66	第27285- 16	グリット	深鉢形	胴 部	単施縦文A <sup>2</sup>		マメツ不明	II群 a類
70	176回版- 67	第27285- 18	グリット	深鉢形	胴 部	単施縦文A <sup>1</sup>		ナデ横+ミガキ縦	II群 a類
71	176回版- 68	第27285- 19	グリット	深鉢形	胴 部	単施縦文A <sup>2</sup>		ナデ横+ミガキ縦	II群 a類
72	176回版- 69	第27285- 20	グリット	深鉢形	胴 部	竹管文A+ループA類		ナデ横	I群 d類
73	176回版- 70	第27285- 9	FY25	深鉢形	胴 部	竹管文C・A	X d文探査	ナデ横・斜	III群 b類
74	176回版- 71	第27285- 10	FY25	深鉢形 I	口縁部	単施縦文A <sup>1</sup>		ミガキ横・斜	II群 a類
75	176回版- 72	第27285- 11	FY25	深鉢形 I	口縁部	単施縦文C <sup>2</sup>		ナデ横	II群 a類
76	176回版- 73	第26685- 7	グリット	深鉢形 C	口縁部	ループA類		ミガキ横	I群 a'類
77	176回版- 74	第27285- 13	FY25	深鉢形	胴 部	ループE類		ナデ・ミガキ縦	I群 a'類
78	176回版- 75	第27285- 14	FY25	深鉢形	胴 部	単施縦文C <sup>2</sup>		ナデ・ミガキ横	II群 a類
79	176回版- 76	第27285- 15	FY25	深鉢形	胴 部	ループB類		ミガキ横・斜	I群 a'類
80	176回版- 77	第27285- 16	FY25	深鉢形	底 部	単施縦文A <sup>1</sup>		マメツ不明	II群 a類
81	176回版- 78	第27285- 12	FY25	深鉢形 I	口縁部	単施縦文A <sup>1</sup>		マメツ不明	II群 a類

### 第35表 一ノ坂遺跡第Ⅳ次調査出土石器計測観察表

#### I群石器〔石礫〕

番号	遺物名	回 号	番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形態	測量調整	備考
1	B Z - 39	第177000E- 7	第26900- 15	H Y17	f	2.29	1.68	0.44	7.6	珪質頁岩	I-A群-X-a類		未完成石器
2	B Z - 19	第177000E- 4	第27400- 3	北区	H	1.90	1.10	0.30	9.6	珪質頁岩	I-A群-X-a類		未完成石器
3	B Z - 50	第177000E- 1	第26900- 16	H Y17	f	2.75	1.47	0.34	1.6	珪質頁岩	I-A群-X-a類		完成功能
4	B Z - 24	第177000E- 5	第27400- 2	北区	H	(3.14)	1.24	0.22	0.6	珪質頁岩	I-A群-X-b類		尖端部欠損
5	B Z - 7	第177000E- 5	第26700- 2	H Y15	f	2.90	1.57	0.32	0.6	珪質頁岩	I-A群-X-d類		完成功能
6	B Z - 19	第177000E- 6	第27400- 1	北区	H	(1.79)	1.30	0.22	0.4	珪質頁岩	I-A群-X-d類		尖端部欠損
7	B Z - 42	第177000E- 9	第26900- 17	H Y17	f	3.16	2.22	0.60	3.5	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + R <sup>4</sup>	未完成石器
8	B Z -	第177000E- 10	第26900- 5	北区	H	3.19	2.00	0.53	3.9	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + R <sup>4</sup>	未完成石器
9	B Z - 29	第177000E- 2	第26700- 2	H Y15	f	2.42	1.01	0.24	0.5	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + R <sup>4</sup>	未完成石器

#### II群石器〔石匙〕

番号	遺物名	回 号	番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形態	測量調整	備考	
10	B Z -	第179000E- 40	第27200- 9	H Y23	f	6.47	4.31	1.27	32.4	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + R <sup>2</sup>	未完成石器	
11	B Z -	第180000E- 47				—	6.66	5.22	1.36	60.5	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + R <sup>2</sup>	青色石料 (場之素生土)
12	B Z - 1	第179000E- 44	第27100- 9	H Y20	f	7.50	4.38	1.38	50.5	珪質頁岩	I-A群-X-a類	I-Ea + R <sup>2</sup>	未完成石器	
13	B Z - 2	第179000E- 46	第26700- 11	H Y15	f	7.46	3.10	1.02	35.4	珪質頁岩	I-A群-X-a類	I-Ea + R <sup>2</sup>	未完成石器	
14	B Z -	第178000E- 32	第27000- 2	H Y17	f	(5.22)	4.66	1.30	20.4	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
15	B Z - 47	第177000E- 20	第27300- 3	北区	H	(6.95)	4.46	1.16	54.5	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
16	B Z -	第178000E- 23	第27300- 9	北区	H	(5.29)	4.81	1.11	33.6	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
17	B Z -	第179000E- 37	第27100- 13	H Y23	f	(3.10)	5.00	1.00	16.0	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
18	B Z - 34	第179000E- 34	第27000- 5	H Y17	f	(5.67)	4.76	1.14	24.0	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
19	B Z -	第178000E- 27	第27100- 10	H Y23	f	(4.47)	4.70	0.76	20.8	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
20	B Z -	第180000E- 48				—	9.60	5.26	1.62	63.0	珪質頁岩	I-Ea + R <sup>2</sup>	青色石料 (場之素生土)	
21	B Z -	第178000E- 26	第26700- 6	H Y15	f	(5.83)	6.40	1.10	46.6	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
22	B Z - 33	第179000E- 24	第27000- 3	H Y17	f	(5.23)	6.54	1.33	46.8	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	破損面有り	
23	B Z -	第177000E- 21	第26800- 4	H Y15	f	7.70	4.32	1.24	44.2	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	未完成石器	
24	B Z - 23	第178000E- 30	第27400- 7	北区	H	(4.32)	4.00	0.68	17.4	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
25	B Z - 32	第178000E- 31	第27400- 4	北区	H	(3.70)	3.70	1.14	3.5	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
26	B Z -	第179000E- 41	第27300- 5	北区	H	(4.74)	3.92	0.96	17.0	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	破損面有り	
27	B Z -	第177000E- 22	第27000- 6	H Y17	f	8.83	3.49	0.80	13.2	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	未完成石器	
28	B Z - 36	第179000E- 25	第27300- 1	H Y17	f	6.47	3.67	0.98	22.8	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	未完成石器	
29	B Z -	第179000E- 35	第27100- 11	H Y21	f	(5.30)	4.00	0.68	12.2	珪質頁岩	I-B群-X-b類	I-Ea + R <sup>2</sup>	破損面有り	
30	B Z - 41	第177000E- 19	第26900- 19	H Y17	f	6.47	2.42	0.66	9.6	珪質頁岩	I-C群-X-c類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	使用底有り	
31	B Z - 3	第177000E- 17	第26700- 17	H Y15	f	6.75	2.56	0.58	9.5	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>		
32	B Z - 43	第177000E- 16	第26900- 26	H Y17	f	5.71	2.80	0.44	6.8	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>		
33	B Z - 18	第177000E- 13	第27400- 6	北区	H	6.62	1.79	0.49	5.0	珪質頁岩	I-B群-X-a類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	使用底有り	
34	B Z -	第177000E- 11	第27200- 16	H Y25	f	5.86	2.38	0.64	8.5	黑色致密頁岩	I-B群-X-d類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	使用底有り	
35	B Z - 8	第177000E- 12	第26700- 4	H Y15	f	6.42	3.26	0.88	15.2	珪質頁岩	I-B群-X-c類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>		
36	B Z - 27	第178000E- 23	第26700- 7	H Y15	f	7.89	4.50	1.12	29.8	珪質頁岩	I-C群-X-a類	I-Ea + R <sup>2</sup>	未完成石器	
37	B Z -	第178000E- 29	第26700- 5	H Y15	f	4.32	2.60	0.52	6.0	珪質頁岩	I-C群-X-d類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	未完成石器	
38	B Z - 15	第177000E- 18	第27300- 2	H Y17	f	5.62	2.44	0.45	4.4	珪質頁岩	I-C群-X-d類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	未完成石器	
39	B Z -	第180000E- 50	第27200- 5	H Y22	f	4.56	2.34	0.55	5.4	珪質頁岩	I-C群-X-d類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	未完成石器	
40	B Z - 13	第177000E- 19	第26700- 3	H Y15	f	4.25	2.90	0.34	3.9	珪質頁岩	I-C群-X-d類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>		
41	B Z - 25	第177000E- 14	第27400- 5	北区	H	4.44	1.84	0.54	4.3	珪質頁岩	I-C群-X-d類	I-Ea + R <sup>2</sup>	使用底有り	

#### III群石器〔兩尖匕首〕

番号	遺物名	回 号	番号	出土地区	層位	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形態	測量調整	備考
42	B Z -	第179000E- 45	第22700- 12	H Y21	f	(15.36)	7.52	2.63	230.0	珪質頁岩	I-E群-X-b類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	破損面有り
43	B Z -	第180000E- 49	第22700- 7	北区	H	(7.98)	7.90	1.54	125.0	珪質頁岩	I-E群-X-b類	I-Ea + b + R <sup>2</sup>	破損面有り

## IV群石器[石鉗]

遺物番号	遺物名	国・版・番号	標印番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形 種	測量調整	備 考
44	BZ 4	第18000番- 54	第26000- 2	HY15	f	10.86	6.32	1.79	180.0	珪質頁岩	平行- I a 頭	I-E a b + R <sup>2-9</sup>	完全成形品
45	BZ 35	第17900番- 28	第27000- 6	HY17	f	(5.86)	5.86	1.40	39.0	珪質頁岩	平行- II b 頭	I-E a b + R <sup>2-9</sup>	破損面有り
46	BZ 7	第18000番- 50	第26000- 3	HY15	f	(10.56)	5.17	2.06	150.0	珪質頁岩	平行- II b 頭	I-E a b + R <sup>2-9</sup>	完全成形品
47	BZ 22	第18000番- 60	第26000- 5	HY16	f	5.60	3.52	1.48	35.0	珪質頁岩	平行- II b 頭	I-E a b + R <sup>2-9</sup>	破損面有り
48	BZ -	第18000番- 52	第26000- 6	HY16	f	(5.86)	3.66	0.85	16.0	珪質頁岩	平行- II b 頭		破損面有り
49	BZ 9	第18000番- 51	第26000- 10	HY15	f	(5.86)	2.70	1.80	12.2	珪質頁岩	平行- II b 頭		基面欠損
50	BZ 11	第18000番- 53	第26000- 9	HY15	f	(5.86)	2.03	1.33	14.2	珪質頁岩	平行- II b 頭		尖状部欠損

## V群石器[石錐]

遺物番号	遺物名	国・版・番号	標印番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形 種	測量調整	備 考
51	BZ 38	第17900番- 42	第26000- 18	HY17	f	3.10	1.58	0.60	2.7	珪質頁岩	V背-b頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	使用痕有り
52	BZ 45	第17900番- 43	第27000- 11	FY25	f	2.47	1.57	0.60	2.4	珪質頁岩	V背-b頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	尖端部欠損

## VI群石器[石鎌]

遺物番号	遺物名	国・版・番号	標印番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形 種	測量調整	備 考
53	BZ 49	第18100番- 57	第26000- 1	HY15	f	5.98	2.88	1.55	30.6	珪質頁岩	尾鋸- I 頭		

## VII群石器[鍔器]

遺物番号	遺物名	国・版・番号	標印番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形 種	測量調整	備 考
54	BZ 6	第17900番- 38	第26000- 12	HY15	f	5.12	1.94	0.55	8.0	珪質頁岩	尾鋸- a 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
55	BZ 37	第17900番- 36	第26000- 21	HY17	f	(3.02)	2.80	0.92	8.7	珪質頁岩	尾鋸- a 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
56	BZ 29	第18100番- 59	——	北区	H	6.32	3.94	1.10	31.4	珪質頁岩	尾鋸- a 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
57	BZ 27	第17900番- 38	第27000- 9	HY23	f	5.14	3.52	0.85	20.2	珪質頁岩	尾鋸- b 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
58	BZ -	第18100番- 56	第27000- 12	FY25	f	5.14	4.00	0.70	15.4	珪質頁岩	尾鋸- b 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
59	BZ 46	第18100番- 58	第27000- 4	北区	H	7.47	3.02	0.75	17.2	珪質頁岩	尾鋸- b 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
60	BZ 16	第18100番- 61	——	北区	H	5.06	4.00	1.12	24.0	珪質頁岩	尾鋸- b 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	
61	BZ -	第18100番- 62	第27000- 6	北区	H	4.02	3.72	1.14	19.4	珪質頁岩	尾鋸- b 頭	I-E a b + R <sup>4-5</sup>	

## X群石器[石製品]

遺物番号	遺物名	国・版・番号	標印番号	出土地区	層位	高さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	形 種	測量調整	備 考
62	BZ -	第17700番- 8	第27000- 1	DY27	f上部	2.16	0.80	0.36	0.6	珪質頁岩	X群- c 頭		

第36表 一ノ坂遺跡第VI次調査出土器物分類計測表

遺物番号	出土地区	種別	層位	分類	長径 (cm)	周径 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石材	標印番号	備考
1	297	HY17	凹石	III	1B+E C+C8	15.1	5.2	5.2	596	砂 岩	第27000- 9
2	409B	HY17	凹石	II	1A+E A+C13	17.4	7.8	4.4	900	珪質○岩	第27000- 7
3	406B	HY17	磨石	II	1B+E A+D'1	12.5	7.5	7.2	900	玄 山 岩	第27000- 8
4	338	HY18	凹石	II	1B+E A+C3	8.6	6.4	4.6	338	安 山 岩	第27100- 1
5	387	HY23	凹石	II	1B+E A+C3	13.9	6.3	4.4	530	矽 岩	第27200- 1
6	391B	HY23	凹石	II	1B+E A+C13	15.5	4.9	3.7	400	矽 岩	第27200- 2
7	420	HY24	凹石	II	1B+E A+C10	(8.6)	(5.6)	(3.5)	160	花 岩	第27400- 8 次表面有り

## 第7節 第Ⅷ次調査

### I 調査の経過『第275図』

今回の第Ⅷ次調査は、一ノ坂遺跡での最終調査となる。調査対象は、これまでの第I次～Ⅶ次調査を実施してきた範囲の南側にあたる果樹園一帯で、果樹に対する影響から、試掘の内諾が得られず未調査となっていた箇所である。

地権者との交渉で、坪掘以外の調査という前提で許可を戴いたことから、ボーリング探査を主体とする調査で実施することにした。ただし、試掘の可能な畠地にはトレンチを配することにし、平成6年4月18日から開始した。トレンチ箇所は第275図に示すように、舌状台地の上場地点であり、Bトレンチ以外からは遺構、遺物は確認されなかった。

ボーリング調査は同図で示す官地境から南の小川までの範囲、約3,000m<sup>2</sup>を対象とした。最初に測量用基準杭(T1～T4)を設定し、地形図の作成を行い、後にボーリング調査の結果を地形図に記録する方法で進めた。

本遺跡の遺構、特に住居跡の覆土には赤褐色の焼土を含む特徴が有り、この土色を確認した範囲にはほぼ遺構が存在することが判っている。この点を考慮しながら慎重にボーリングを開始し、約10mの間隔で、段丘に沿った東西方向に3mのピッチで実施した。

ボーリングは、径20mmの1m接続による長さ3mの打ち込み用で、深さを約20cm～30cmの単位を基本に確認する方法をとった。

台地の上場は果樹園造成の際に西方から東方へ土砂を移動したとの情報があり、それを示す結果も得られている。遺構もこれまでの調査と同様に段丘の下部に沿って認められた。南方部の小川が流れる段丘下部は砂利層で遺構は存在しないことが判った。

現地説明会は5月10日に開催した。同日の午後からとレンチ箇所65m<sup>2</sup>の埋め戻しを行い最終調査を終了した。

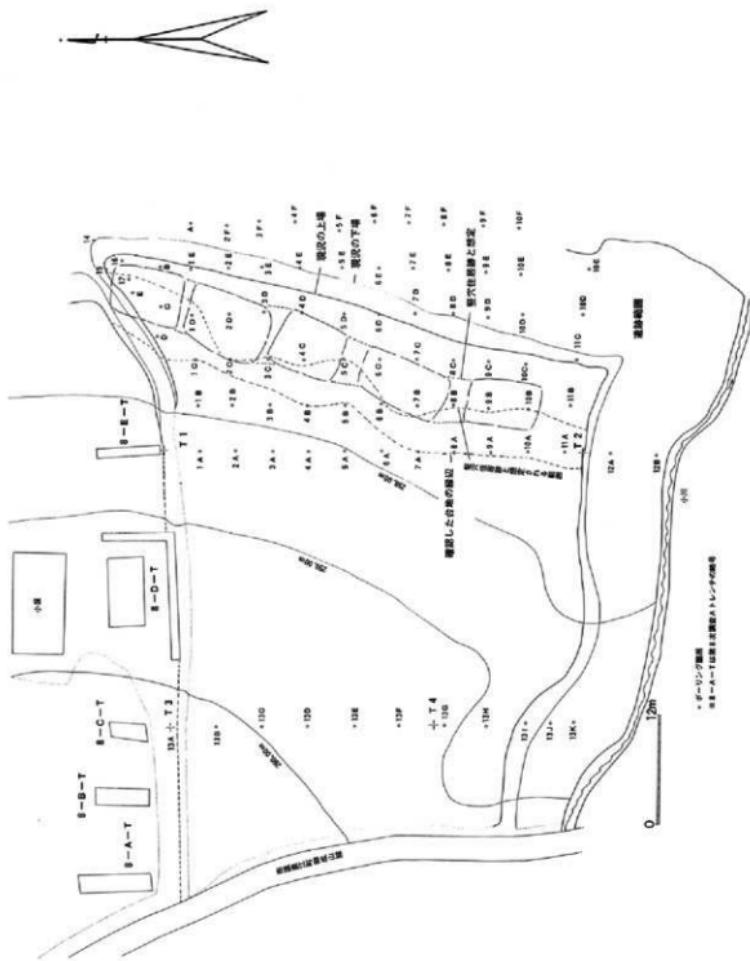
### II 検出された遺構

#### 1) トレンチ調査『第275図』

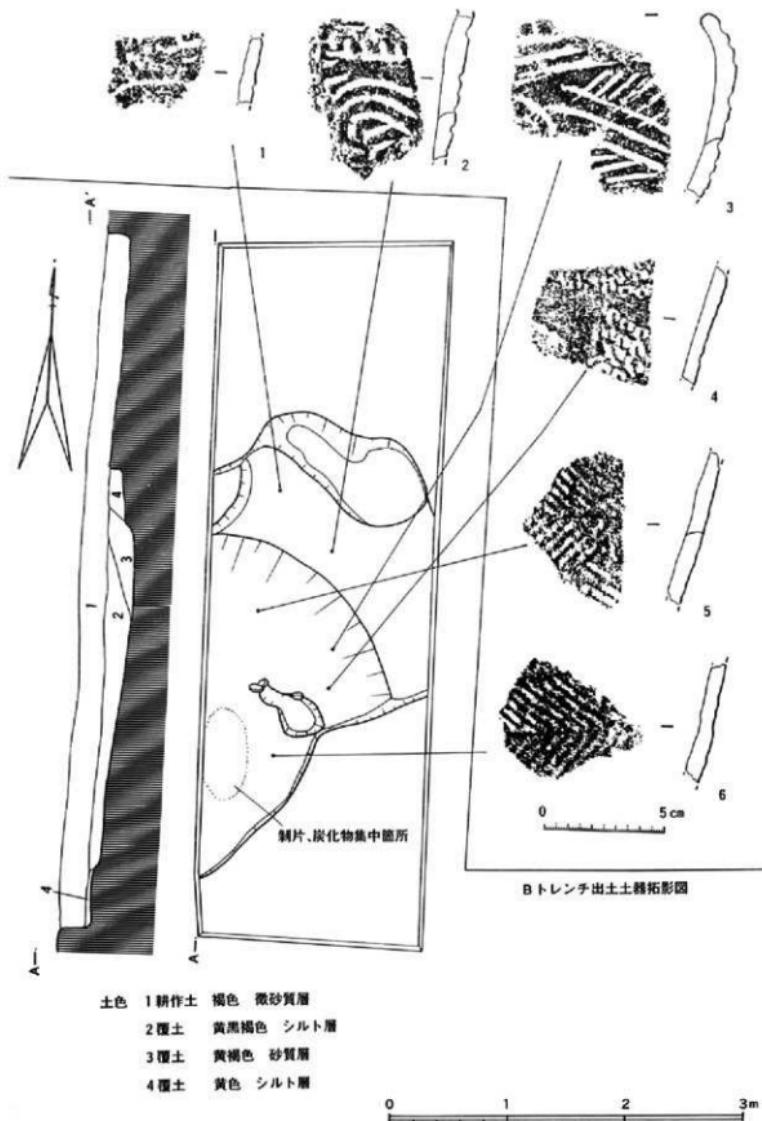
段丘上部を対象にA～Eの5本のトレンチを配して確認を行ったが、いずれのトレンチも耕作土の下は地山となる黄褐色粘土層であり、遺構・遺物を確認したのはBトレンチのみであった。耕作土の深さは20～40cmで、東側に行くにつれ耕作土が深くなっている。

#### • Bトレンチ『第276図』

東西2m、南北6mのトレンチで、中央に不整形状を示す落ち込みが確認された。底面から



第275図 ノハラ山第7回次調査区全体図



第276図 一ノ坂遺跡第Ⅴ次調査B トレンチ遺構平面図

側面は不自然な階段状となっており、3枚の覆土も黄褐色系の粘土や砂利層、シルト層を含み、人為的な遺構ではないものとみられる。斜面から最深部より少量の炭化物、焼土、剥片、土器片が出土している。剥片は第2図の点線で示した小範囲に集中して確認された。全体の様子から、風倒木によって凹んだ跡を捨て場として利用したと考えられる。

遺物としては、土器片34点、剥片44点、凹石1点、磨斧の破片1点の計80点が出土している。この中で注目されるのが土器であり、織状撚糸圧痕文を有する土器片が5点含まれている。

## 2) ポーリング調査『第257図』

本遺跡は段丘下に沿って遺構が配置していることから、段丘の前後を中心にポーリング探査を実施した。最初にT1とT2の基準線を南北に設置し、東西南北に3~5mの間隔でポーリングポイントを設定した。遺構の確認によってはさらに間隔をせばめる方法をとる。

ポーリングポイントは、段丘周辺の遺構を確認するための1A~11Aの南北に11起点を設け、起点より東西に5箇所のポイント(1A~1F)等の55箇所を配置した。

さらに、段丘の中央の遺構を確認するために、南北方向に13A~13Kの10箇所のポイントとサブポイントとして周辺を埋めるように14~17・B~E・12A・12Bの10箇所も設定した。

### • 1 A - 1 F 地点『第277図』

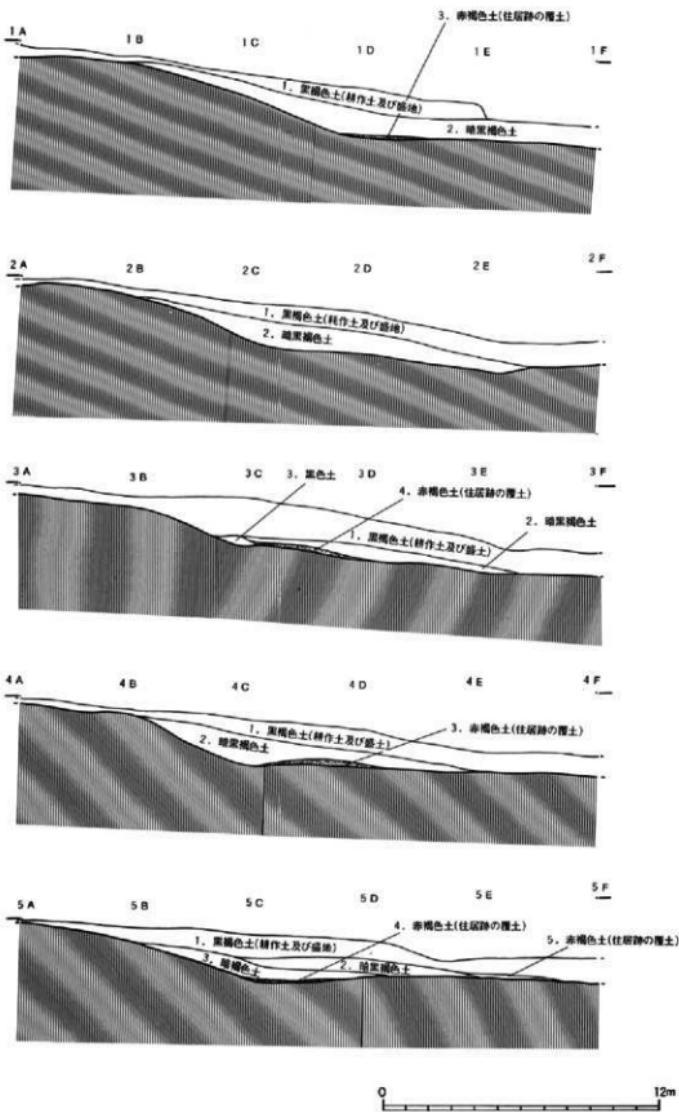
この地点は連房型竪穴住居跡が確認された箇所のすぐ南側にあたる。1A・1Bの地点が遺構確認面(地山)までの深さが50cmで、段丘の縁辺部に相当する。1Cが1mで段丘の斜面にあたり、1D地点が段丘の下場とみられ2.2mの深さを示している。

1E・1Fは段丘の平坦面で1mの深さで確認面まで達することが判った。土盛層は、1C~1E付近まで及んでいる。

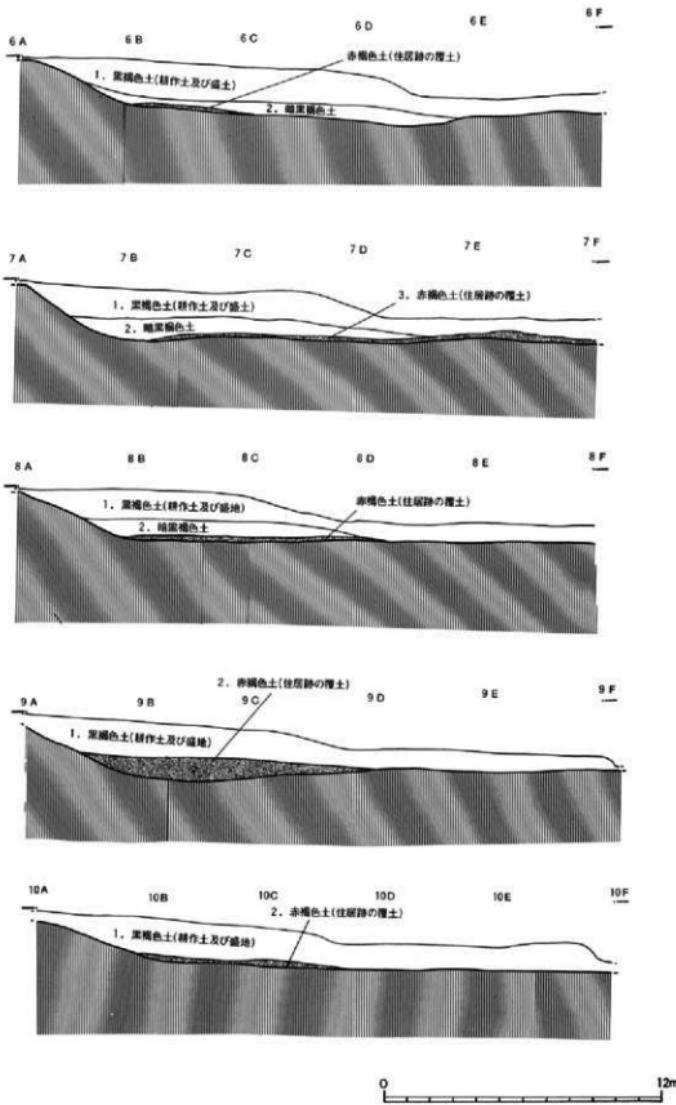
遺構は、1D地点の2mの深さで焼土が確認されたことから慎重に地山まで下げたところ、約3m、つまり焼土確認から1mの深さを示していた。焼土の広がりを追うために1D地点の前後をサブ・ポーリングを加えたところ約4mの幅を有することが確認された。竪穴住居と推測される。

### • 2 A - 2 F 地点『第277図』

遺構確認面までの深さは、1A地点とほぼ同じで2D地点で確認面まで3.15mに達する。2Aの地点からは焼土は認められないが、採集した暗黒褐色に少量の炭化物が含まれており、赤褐色土以外の遺構覆土と類似することから、この地点も遺構が存在するものと推測される。



第277図 一ノ坂遺跡第2回次調査土層想定図(1)



第278図 一ノ坂遺跡第9次調査土層想定図(2)

- 3 A - 3 F 地点『第277図』

3 Aからの地点は、盛土が1.5mあり、赤褐色を有する焼土が3 Cから3 Dにかけて確認された。この地点も、遺構が存在することは確実である。

- 4 A - 4 F 地点『第277図』

4 Aからの地点は、黒褐色土の盛土及び耕作土が1 m前後を有するものと推測され、段丘の傾斜が発達している箇所と想定される。この地点からも赤褐色の焼土が4 C～4 Dの1.7m～1.9mにかけて採集され、遺構の底面までの深さは2.85mで、約1 mの深さを示している。

- 5 A - 5 F 地点『第277図』

5 Aからの地点からも赤褐色からの焼土が5 Cと5 Eで採集されている。段丘斜面はゆるやかな状況を呈する箇所と考えたい。また5 E地点からも赤褐色土が採集されている。赤褐色土が分布する地点を平面形状に見ると段丘下場に沿って帯状に認められる。5 E地点は、東にずれることから、遺構（住居跡）とは想定するには問題が残る。

- 6 A - 6 F 地点『第278図』

6 Aの地点では、段丘直下にあたる6 B地点で赤褐色土を確認した。確認面での深さは2.1mで、約1 mの壁を有するものとみられる。

- 7 A - 7 F 地点『第278図』

7 Aの地点は赤褐色土が東方に伸びる特徴を示す。下層の確認をみると7 Bでは遺構の床面が約3 mの深さで認められたが、7 Cからは確認されず、上部に堆積した焼土を含む赤褐色土がなんらかの理由で東側に流れ込んだものと推測される。

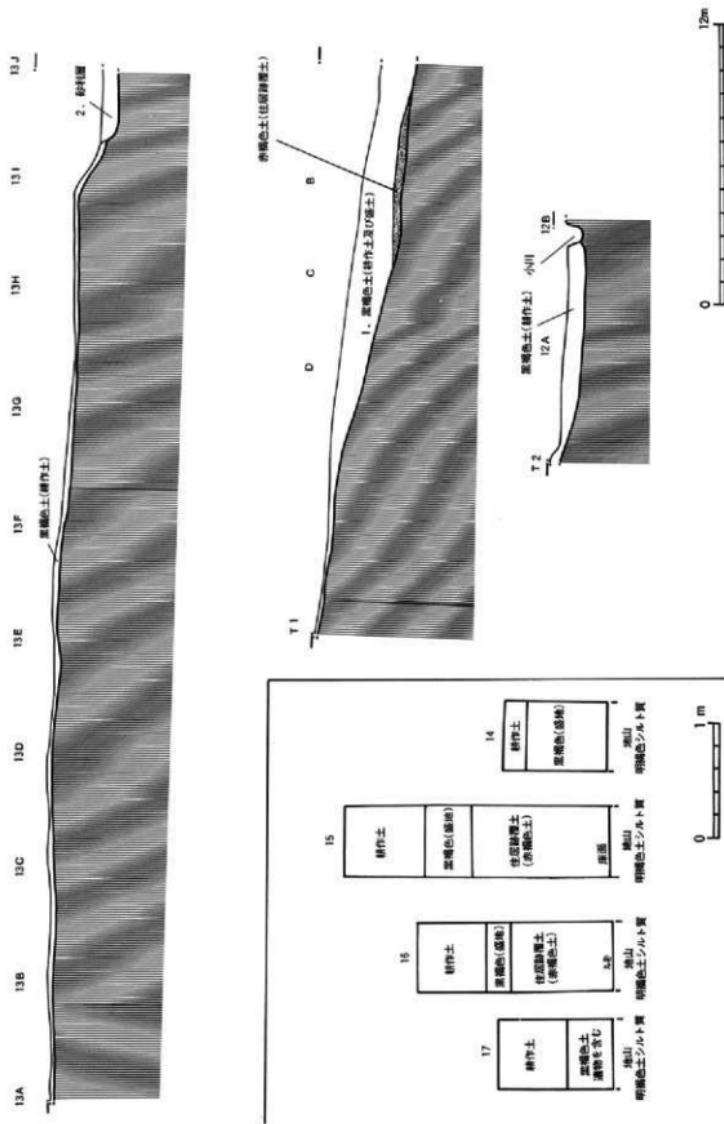
- 8 A - 8 F 地点『第278図』

8 Aからの地点も8 A～8 Dにかけて赤褐色土が分布している。遺構は8 B地点で確認されたが、8 C地点から東河には及んでいない。

- 9 A - 9 F 地点『第278図』

9 Aからの地点は、赤褐色土を示す層位が深く、9 B地点で90cmに達している。9 C地点での確認では、遺構の底面は3.2mの深さであった。

第279図 ノ坂遺跡第Ⅶ次調査土層想定図(3)



・10A-10F地点『第278図』

10Aからの地点は、10Bで1.8mに赤褐色土、2.85mで遺構の底面に達する。

・11A-11E~10A-10F

11Aからの地点は、なだらかに傾斜面が続く程度で、赤褐色土や遺構は認められなかった。深さは、11Bの最深で1.8mで確認面に達する。

・T 1-B地点『第279図』

1A地点と連房式竪穴住居跡が確認された第VII次調査の中間に配したもので、B地点の1.7mに焼土、さらに2.9mの深さに遺構の底面が存在することが判った。中央部の13A~13Jの地点は耕作土が約20cm~30cm程度の深さで続く以外は遺構の存在は認められなかった。

以上なことから、今回のボーリング探査の結果を総括すれば、第275図に示したようにT 1-B地点の範囲に遺構が存在するものと考えられる。

しかも今回の遺構は、従来の調査結果を参考に推測すれば、大型を有する竪穴住居跡の可能性が高く、所謂「大型竪穴住居跡」か「連房式竪穴住居跡」の判断は困難であるが、少なくとも約50m程度を有する大型の住居跡である公算が濃厚である。

### III 検出された遺物

今回の調査区は前述したように、大半が果樹園で占められることから、ボーリング探査が主体であり、遺物はBトレンチからの出土だけであった。遺物の総数は80点であり、土器片34点、剥片44点、凹石1点、磨斧の破片1点となっている。特に、特記すべきものはないが、出土土器の中で彫状圧痕文を有する土器が3点認められている。原体を押圧した後に彫状圧痕部分に沈線文を加えて原体部分を消す手法であり、米沢市成島の窪平遺跡出土のa群3類土器に類似するものである。

### IV 要 約

今回の調査は、一ノ坂遺跡の最終調査となるもので、これまで未調査だった遺跡の南側を確認したことは、ほほ、遺跡全体の様子が明らかとなといえる。

遺跡は南北180m、東西90mの範囲と想定され、段丘とその下場となる平坦地を利用して、集落を構成している。

段丘には、広場と周辺に墓壙を置き、住居跡を段丘下の平坦部に配置する構造となっている。ボーリング探査ではあるが大型住居跡とみられる遺構を確認することができた。

ただし、これらの遺構（住居跡群）が、第Ⅰ次調査で確認したような石器工房を行った大型堅穴住居跡になるのか、第Ⅵ次、第Ⅶ次調査で確認した連房式堅穴住居跡となるのか、あるいは両者とは異なる堅穴住居跡群を形成するのかは現在の段階では明確にできない。

この点については、今後の課題としておくが、少なくとも集落の南北両端に大型住居を設置し、中央の東側に一般居住地を配置する可能性が高い。

また、土器の中に蕨状圧痕文を示す土器が含まれている。この土器群は、前期初頭の花積下層式の最終段階に認められるもので、一ノ坂遺跡集落を構成する直前に位置するものである。

これまでの一ノ坂遺跡の調査ではこの種の土器は確認されておらず、所謂「一ノ坂集落」が定着する以前の遺物と考えられ、集落跡の成立に係る資料として注目される。

## 第3章 総括

### 第1節 一ノ坂遺跡の集落

これまでの第Ⅰ次調査から第Ⅶ次調査の調査と周辺の分布調査及び試掘調査によって、一ノ坂遺跡は、第280図に示すように約13,500m<sup>2</sup>の小規模な遺跡であることが判る。しかし、検出された遺物や遺構の内容は、他に類例のない極めて特異なもので、縄文時代前期における集落の構成を再検討すべき資料を得たといつても過言ではない。

ここでは、過去6年の調査資料をもとに一ノ坂の集落について考えてみたい。

集落は南北154m、東西90mの舌状に張り出した丘陵（河岸段丘）上の縁辺から、その段丘の下部つまり、麓にそって規則的に遺構を配置している。

段丘上は、僅かに焼土が点在し、唯一、段丘の縁辺に墓壙が配置されている程度である。このことは、段丘全体が祭や祭祀等の役割を有する空間として機能していたことを意味している。

一方、段丘の狭い下場は、南東から北西にかけて約10m、深さ2m位の河川が蛇行して存在する。遺構は、この河川と段丘との約12mの空間を利用して大型の竪穴住居跡を始め、小竪穴住居等を馬蹄形状に配置している。

しかも、住居跡群は左右に大型住居、中間に小規模な竪穴住居群を配置するなど、計画的な配置関係を示していた。

さらに、注目されるのが、大型住居跡と連房式竪穴住居跡や連房式竪穴住居跡の廃絶後に構築している4期に属する16棟の竪穴住居跡の関係である。

可能性を簡単に列挙すれば次の6通りがある。

- ①大型住居と連房式竪穴住居跡の並行関係
- ②大型住居と連房式竪穴住居跡～1期の竪穴住居跡群の継続共存
- ③大型住居と連房式竪穴住居跡～2期の竪穴住居跡群の継続共存
- ④大型住居と連房式竪穴住居跡～3期の竪穴住居跡群の継続共存
- ⑤大型住居と連房式竪穴住居跡～4期の竪穴住居跡群の継続共存
- ⑥大型住居と連房式竪穴住居跡の廃絶後に1期～4期の竪穴住居跡群を構築

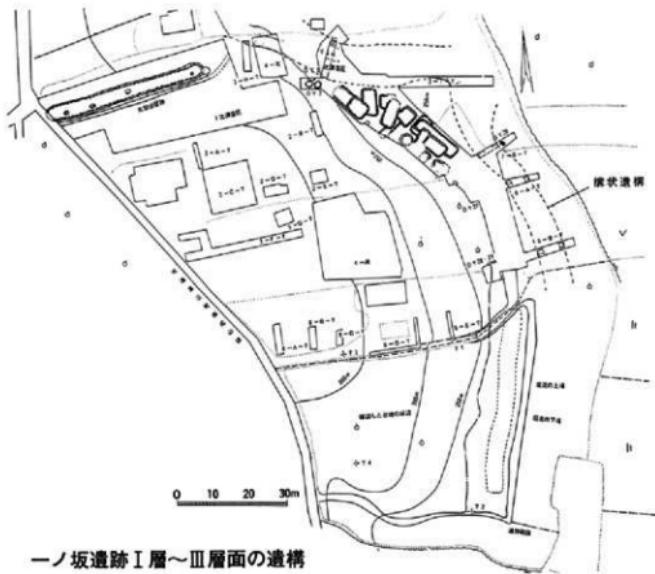
では、上記の可能性を具体的に検証する。

大型住居跡は、構築後から機能していた間に4回の整地を行っている。土器の分析では整地第Ⅰ層～第Ⅳ層内から認められた土器群は、広義の「関山式」の範疇で捉えられ、特に年代的

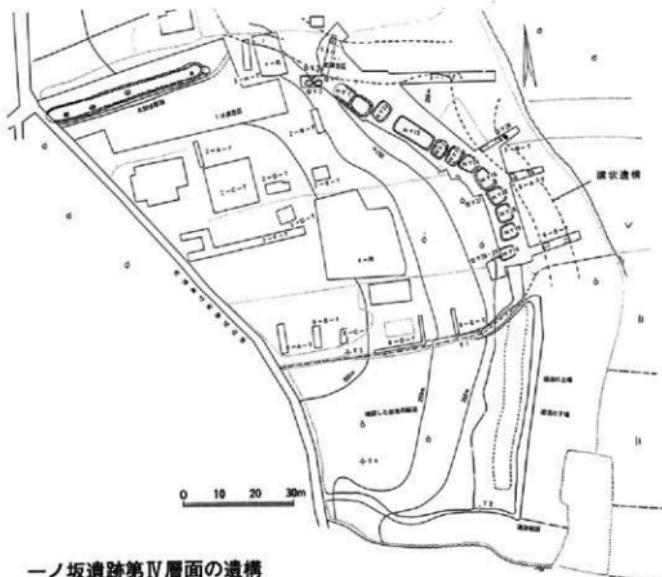


第280図 一ノ坂遺跡範囲図

● 試堀・ボーリング探査箇所

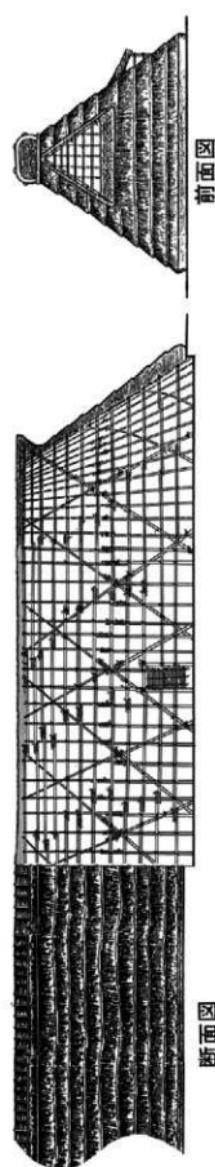
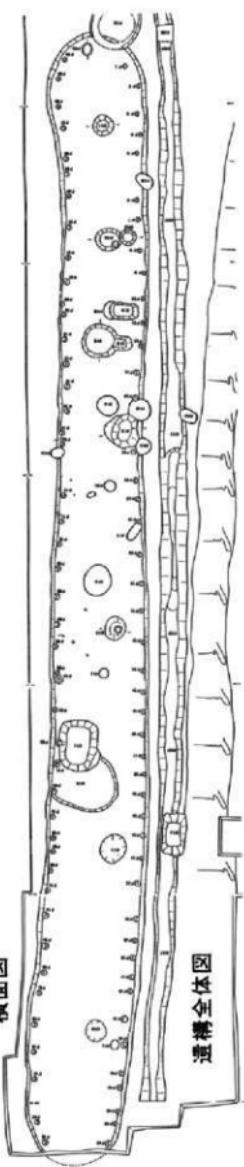


一ノ坂遺跡Ⅰ層～Ⅲ層面の造構



一ノ坂遺跡第Ⅳ層面の造構

第281図 一ノ坂遺跡造構全体図



第282図 一ノ坂通跡HB1復元推定図

相違は認められない。このことから、大型住居跡が存続した時間的空間は関山式に限定される。

一方、連房式堅穴住居跡は掘り下げた2棟の住居跡より、意図的に埋められていることが確認されている。壁や柱穴の依存状況は明瞭で、構築してからそれほど時間を得ないで埋め戻されたと判断される。1～4期の堅穴住居は明らかに連房式堅穴住居跡を意図的に埋めて構築したもので、大型住居が機能している段階で行われたとみるべきである。

他に類をみない連房式は個々の住居跡が屋根で連なる構造と想定される。少ない敷地を活用した構築物としては理想的な居住地であったが、長期の生活を考えた場合、かならずしも快適な空間ではなかった感がある。短期間で廃絶した背景には、縄文人の精神作用の影響が多分に想定される。

このことからすれば、①と⑥の成立は困難である。むしろ、②～⑤の可能性が高い。ただし、大型住居跡の構造的な耐久性も加味しなければならなことから結論は控え、②～⑤を示唆するに留めておく。

次に、大型住居跡と連房式堅穴住居跡・小規模堅穴住居跡の関係について考えてみる。既に、大型住居跡は石器製作を実施する工房跡であることは明らかである。連房式堅穴住居跡及び小規模堅穴住居跡群からは、大型住居跡でみにれた多量の石器群は存在せず、従来の集落跡と同様な出土量となる。

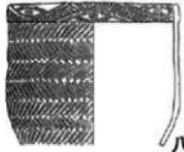
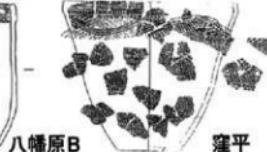
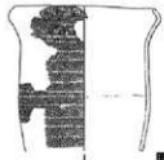
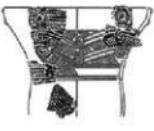
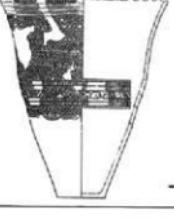
従って、大型住居跡を石器工房、連房式堅穴住居跡及び小規模堅穴住居跡は居住空間とみるべきで、いわば工場と宿舎的な関係と考えたい。

以上のことから、一ノ坂遺跡の性格は、台地を広場として石器工房と居住地を馬蹄形に配置する石器製作を目的に成立した工房集落と結論づけたい。

## 第2節 一ノ坂遺跡の土器

これまでの第Ⅰ次～第Ⅶ次調査で検出した一ノ坂遺跡出土の土器は、総数で点を数える。土器群の多くは、地文をループ文で構成するものが大半で、特に地文と無文帯とを組み合わせて、文様帯を構成する所謂「無文区画」の土器群の存在は注目に値する。

一ノ坂遺跡出土の土器群は、縄文前期初頭に位置し、関東地方の編年でいえば関山式に併行する仲間である。沈線文及び突刺文等で「菱形」や「山形文」を単位文様とし、周りをループ文で埋める構成は、関東地方の影響を受けたもので、米沢市の松原遺跡出土の土器群にも存在している手法である。

		I段階 塔ノ原
		IIa段階 八幡原B
		IIa段階 窪平
		IIb段階 一ノ塙 野山II 窪平
		IIc段階 窪平
		IIIa段階 一ノ坂
		IIIb段階 一ノ坂

第283図 純文前期初頭の土器編年図

しかし、松原遺跡と比較した場合、一ノ坂遺跡と若干の相違を示す。このことを理解するために、さらに一段階古い土器形式を加えて検討することにする。

米沢周辺の前期初頭の遺物を系統的に図示してみたのが第図であり、I段階～Ⅲ段階に区分してみた。

・第I段階の土器は、米沢市塔ノ原遺跡の4層面から出土している。口縁部が外反する尖底土器であり、器面を縦位の燃糸文を転回している。特徴的なものは、口縁部の裏面にも燃糸を加えていることであり、こうした土器は、八幡原A遺跡や横山A遺跡の仲間にも確認されている。この土器を前期の初めとみるべきか、早期末と判断すべきかは議論のあるところであるが、東北南部の早期末から前期初頭を移行する土器形式が判然としているのが現状である。

この土器群の仲間には尖底を有し羽状繩文を施す土器の他に斜繩文を施す尖底や丸底の土器も加わるようである。

・第II段階に入ると羽状繩文を主体とした土器群が急速に普及してくる。特に注目されるのは、蕨状燃糸圧痕文の施文手法の変化で、米沢市の窪平遺跡の切り合い関係を示す移行の分析で、注目される結果が得られた。

・第IIa段階したもので、口縁部文様帯を中心に蕨状燃糸圧痕文を配置し、東部を羽状繩文で構成するものが主体となる。この土器の仲間には、米沢市の窪平遺跡、八幡原B遺跡など6遺跡の他に大石田町庚甲遺跡が知られている。

・第IIb段階には、蕨状燃糸圧痕文に沈線文や突刺文を加えて構成するものが多く、文様も口縁部文様帯から胴部にも広がってくる。特に注意したいのは、蕨状燃糸圧痕文の施文後に先端の「蕨」のみを残し、他の燃糸の箇所を沈線文を加えて消す手法が特徴となってくる。この土器の仲間には、米沢市の窪平遺跡、八幡原A遺跡、松原遺跡等の8遺跡の他に、飯豊町野山II遺跡に良好な資料がある。

・第IIc段階は、蕨状燃糸圧痕文を配してから全て沈線文で再調整して消すもので、第II段階の最終段階の土器といえる。このことから第II段階の文様の系統としては、1. 第IIa段階=蕨状燃糸圧痕文→2. 第IIb段階=蕨状燃糸圧痕文の一部消去→3. 第IIc段階=蕨状燃糸圧痕文の全面消去→4. 第IIIa段階=完全沈線化と変化することが判明している。窪平遺跡からは、ループ文を施文としている土器は一切認められていない。

・第III段階が一ノ坂遺跡の土器群である。この段階に入るとループ文が突然出現してくるのが大きな特徴で、蕨状燃糸圧痕文による文様は沈線文や突刺文による入組状に変化するものとみられる。第III段階はさらに文様構成の特徴から2に分けられることも可能である。

・第III a段階としたもので、口縁部文様帯に「三角」・「菱形」・「山形」状文を沈線文で区画し、外側にループ文を埋めて構成するもので、松原遺跡や一ノ坂遺跡でも僅かにみられる。この仲間には第29図-3に示す入組状を示した土器群も相当含まれており、第II c段階から発展した文様とみられる。

・第III b段階は、第III a段階の特徴であった沈線文等の単位文様から発達した沈線文等を加えないで平行・三角・山形文等の無文部分を残し、ループ文で構成する文様が一ノ坂遺跡では主体を占める。一ノ坂遺跡では、この種の文様帯を有する形態として10群、28類が認められている。土器の大半が破片で占められていることより、何種類の文様帯が存在するかは困難であるが、第III b段階の文様として確立していたことは確実である。この種の文様帯が確認されているのは松原遺跡、一ノ坂遺跡、生蓮寺遺跡等5遺跡がある。ただし、東北南部の遺跡には僅かに含まれているが、関東地方の遺跡には殆ど認められないようである。

さて、参考のために前期初頭を代表する窪平遺跡と松原遺跡、そして一ノ坂遺跡をさらに比較してみると、まず窪平遺跡は、第II a段階～第II c段階に限定される。松原遺跡は、第II a段階～第III b段階と幅を有しているが主体は第III b段階である。一ノ坂遺跡は第III a・III b段階に限定することから、年代区分としては窪平→松原→一ノ坂と列挙することが可能である。

さらに注目したいのは、第III a段階の土器を主体とする松原遺跡の地文種類の比率であり、一ノ坂遺跡と比較すれば次のようになる。

第37表 地文類別対比表 \*文様の明確な土器片を対象作成した。

地文・点数・比率	破片数	比率(%)	地文・点数・比率	破片数	比率(%)
羽状繩文	341	47.6	羽状繩文	476	7.0
結束繩文	253	35.3	結束繩文	351	5.2
ループ文	110	15.4	ループ文	4,162	61.5
組紐繩文	5	0.7	組紐繩文	218	3.2
単節繩文	7	1.0	単節繩文	1,425	21.1
撚糸文	0	0	撚糸文	25	0.4
複節繩文	0	0	複節繩文	96	1.4
無節繩文	0	0	無節繩文	16	0.2
計	716	100	計	6,769	100

《松原遺跡》「松原」1977年春に一部加筆修正

《一ノ坂遺跡》

これによると一ノ坂遺跡では、ループ文によるものが61.5%で半数以上を占め、次いで単節縄文の21.1%、羽状縄文が7%の順となる。

松原遺跡では、羽状縄文の47.6%を筆頭に結束縄文の35.3%、ループ文に占める割合は15.4%と一ノ坂遺跡の4分の1となっている。逆に半数近くを占めるのが羽状縄文で、第Ⅱ段階に近い土器群の特徴をもっている。

ちなみに、窪平遺跡に関しては80%を羽状縄文、次に単節縄文の15%、その他5%となり、第Ⅱ段階では羽状縄文を主要地文としていたのが、第Ⅲ段階に入るとループ文が主要地文に転換したことを意味している。

さて、これまで、各段階の土器群の特徴について述べてきたが、これらの土器群の年代について考えてみる。

第Ⅰ段階の土器は、今一つ判然としないが、撲糸文を有することから前期初頭に加わる前段階、早期の範疇と考えている。

第Ⅱ段階は、蕨状撲糸圧痕文と羽状縄文を主体とするもので、関東地方の編年の花積下層式に平行する土器群である。ただし、第Ⅱb段階や第Ⅱc段階の土器群は地域色が強く、東北南部の特徴といえる。

第Ⅲ段階の土器は広義の関山式に平行するが、第Ⅲb段階の土器、特に無文区画を有する土器群については、東北南部、強いて述べると米沢周辺で発達した文様手法といえそうである。この点は、今後の課題となるが、ループ文を地文とする土器が全体の6割を占めることも指摘しておきたい。

### 第3節 一ノ坂遺跡の石器

大型住居跡を中心に出土した石器は、200万点を越える膨大な数であり、当市に於いても類例のない出土量と言わざるを得ない。石器群を吟味した結果、完成石器が少なく、製作途上の失敗や断念の形態であることが判明した。

すなわち、従来の形態別分類では対応できず、出土した分類石器を検討して製作工程を設定した。それに準じて各製作段階ごとに細類を加えることで、整理可能となった。また、完成時の形態をとどめる石器例として、石匙の第64図1を挙げることができる。この形態を完成石器として捉えることで、石匙の工程復元図を作成した。

また、素材となる剥片からの分類も行った。I群石器の場合、両面に一次剥離面を有する形

態と、両面調整によって中央部に稜線を有する形態では、明らかに第Ⅰ段階における、素材の選択段階での相違といえる。

Ⅱ群石器においても、同様の事項がある。ⅡC群とした形態は、簡単な剥離調整によって整形する形態であり、他のⅡA・ⅡB群との相違は明確である。

Ⅲ群石器に関しては、素材の選出が2形態認められる。完成石器からこの事項を復元することは困難であるが、第Ⅰ・第Ⅱ段階での失敗品や断念品にみることができる。すなわち、大型の原石から剥離した素材と自然剥離の素材の両者を使用していることがわかる。「米沢盆地の原石」で述べているように、目的とする素材を容易に入手できたものと推測する。

Ⅲ群石器は、完成品とした唯一の第101図1も、3点が接合した欠損品であり、厳密にいえば、最終形態は出土なしとなる。最終形態についてはN群石も同様である。出土の大半を占めるのは、I群～N群石器に分類した石鏸・石匙・両尖匕首・石鉛の四器種である。

これらの石器群の最終段階においては、いずれも押圧剥離調整によって仕上げられている形態を有す。I群～N群の石器を中心に製作していたことは、出土数から容易に判断できる。

V群・VI群・VII群石器は、前述した石器群のように、各段階を経て製作される石器群ではないものと推測する。

VIII群石器は、いずれも石核残痕であるが、この形態から大型の剥片を剥離したとは考えにくい。従って、大型剥片は供給地で剥離され、大型住居に運搬されたものと考えられる。

X群石器の出土数は、I次～VIII次に亘る調査区で僅か6点と、極めて少ない。

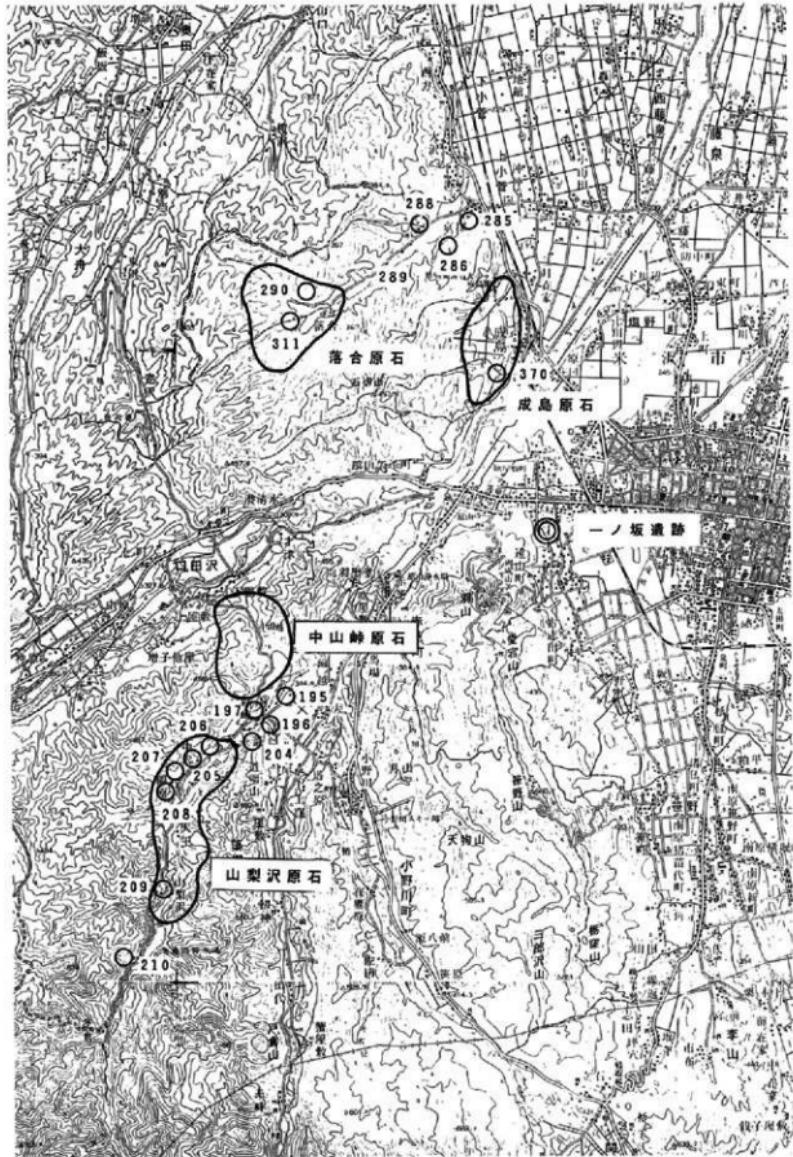
X群石器の大型住居内製作は、出土遺物が微量なことから明確にはいえない。

## I 米沢盆地の石器原石『第284図』

一ノ坂遺跡の石器製作工房跡の発見で米沢市内における石器の存在が高く評価されている。良質の石器は米沢市周辺に頁岩を多量に含む風化した凝灰岩が存在することであり、これまでの調査で明確になった頁岩の分布状況について述べてみる。

米沢市内には米沢西部を中心にして6箇所の硬質頁岩を産出する地域が確認され、河川によって大きく鬼面川と梓川流域の2者に大別される。

前者は鬼面（おもの）川流域の各支流に分布するもので、第282図で示したようにNa290の落合b遺跡とNa311の落合c遺跡を中心として約1.3kmの範囲に分布する「落合原石」、口田沢から小野川に抜ける中山峠付近を中心に南北約1.3km、東西約1kmの範囲に分布する「中山峠原石」、南北が約5.3km、東西約0.7kmのNa208の岡原遺跡を中心に山梨沢周辺に分布する「山梨沢



第284図 珪質頁岩産地分布図

第38表 原石周辺の遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所在地	時期	出土遺物
195	森崎 c	大字築沢字孤塚 4,460-5他	繩文	剥片
196	森崎 b	大字築沢字一盃下 4,899他	繩文[後期・晚期]	土器片、石鎌、搔器、石器剥片
197	森崎 a	大字築沢字森崎 4,804-2他	繩文[後期・晚期]	土器片、石鎌、石鏟、石棒、石器剥片
204	一盃	大字築沢字一盃 4,951-1他	繩文[後期・晚期]	土器片、搔器、石器剥片
205	中沢 a	大字築沢字中台5,044 他	繩文	石器剥片
206	中沢 b	大字築沢字一盃向 4,999-1他	繩文	石器剥片
207	中沢 c	大字築沢	繩文	搔器、石器剥片
208	岡原	大字築沢	繩文	石鏡、搔器、石器剥片
209	山梨沢	大字築沢字山梨沢 6,198他	繩文	石錐、石器剥片
210	富主姫大神	大字築沢字杉沢 6,532-1他	繩文	石鏡、搔器、石器剥片
285	京塚 a	広幡町上小菅字京塚	繩文	石器剥片
286	京塚 b	広幡町上小菅字美ノ堂 山1,840-2他	繩文	石器剥片
288	京塚 d	広幡町上小菅字八ヶ森 1,925-6他	繩文	石鏡、石器剥片
289	落合 a	広幡町上小菅字足倉沢 1,887-30他	繩文	石器剥片
290	落合 b	広幡町上小菅字一盃清水 1,883-47他	繩文	石器剥片
311	落合 c	広幡町上小菅字仲馬場 ノ沢1,881-1他	繩文	石器剥片
370	窪平	広幡町成島字窪平 2,107-54他	繩文[前期・中期]	土器片、三脚石器、石鎌、石鏡、石棒、石匙、土偶等

米沢市内における繩文時代の遺跡数

\*平成7年度10月現在、複合遺跡を含む。

・創草期 2遺跡 ・早期 20遺跡 ・前期 55遺跡 ・中期 60遺跡  
 ・後期 48遺跡 ・晚期 27遺跡 不明134遺跡 合計 346遺跡

原石」、No.370の崖平遺跡の面積とほぼ同じ範囲の南北1.6km、東西0.7kmの成島周辺に広く分布する「成島原石」の4原石産地がある。

後者は米沢東部の梓川上流流域に分布するもので、籠原（ざる）原石と牛山原石が確認されている。

特に、鬼面川周辺に存在する原石は、前述した4箇所の産出地の他に北はNo.285の京塚a遺跡から南のNo.210の富主姫大神遺跡までを含んだ南北約10km、東西約3kmの範囲にも原石の露出箇所が点在しており、広域に分布している。

硬質頁岩は産地によって硬度や色調、石に含まれる含有鉱物が異なっており、米沢市近辺の繩文遺跡の石器を検討すれば使用する原石も各時代によって選定している特徴がみられる。米沢の代表的な遺跡を例にとれば次のようになる。

・繩文早期は二タ俣A遺跡、大清水遺跡、柿の木遺跡を例にとれば、成島原石と落合原石が主流で約8割の石材を使用している。

・繩文前期は八幡原遺跡群を始め、一ノ坂遺跡、松原遺跡を例にとると中山峠原石と山梨沢原石が全体の約7割で、約3割が落合原石を使用している。

・繩文中期は台ノ上遺跡、大清水遺跡、八幡原遺跡群等から鬼面川流域の落合原石、中山峠原石、山梨沢原石、成島原石が平均的に使用している。

・繩文後期から晩期にかけては、山梨沢原石を主体に成島原石、籠原石、落合原石と続き、他に川西町、小国町のメノウ等の使用がみられる。

東北南部の繩文遺跡から出土する頁岩製の石器を実見するかぎりでは約5割強が米沢原産の石器で占められているようである。

これらの原石を産出する一帯にはこれまでに17箇所の遺跡が確認され、いずれも多量の剥片の出土が認められている。この中で、唯一調査を実施したのがNo.370の崖平遺跡であり、一ノ坂遺跡よりも一段階古い前期の住居跡が14棟検出されている。また、遺構の中には剥片を収納した穴に立石を設置した2基の遺構や全長26mの大型住居跡等注目される遺構も検出している。

住居の内部からは、三脚石器が数多く出土し、從来の中期出現説を覆すものとなった。遺跡は、昭和20年代には存在が知られており、これまで出土した三脚石器だけでも3千点を超すといわれている。残念ながら、調査では石器製作を示す痕跡は認められなかったが、本遺跡も一ノ坂遺跡と同様な石器製作を中心とした集落跡の可能性が考えられる。さらに、一ノ坂遺跡は2次作業場であり、原石を加工し原形を整えるための1次加工場は、必ず原石産地付近を作業場としている可能性が高く、こうした遺跡の確認が今後の課題となる。

## II. 『一ノ坂技法』の特徴

出土した二次調整を有す剥片について、分類・細類を加えた。その結果については前述した通りである。ここではそれらの形態がどのような目的をもって製作されたのかを述べる。

第表に示した「一ノ坂技法による石器製作概念図」は、一連の流れを想定し作成したものである。屋外作業をⅠ次作業、屋内作業をⅡ次作業と分けた。

まずⅠ次作業では、原石の吟味・採取、次に原石の打削作業、さらに一次粗形（原形）製作のⅢ段階が想定される。屋外作業と屋内作業を結ぶのが運搬である。屋内でのⅡ次作業は、既に目的とする素材を選択し、各器種の製作を開始する。製品、すなわち完成石器に至るまでには、概ね第Ⅰ段階から第X段階を経るものと想定される。その製作過程を第200図に一括して示した。これらの技法を総称して『一ノ坂技法』と呼ぶことにする。

『一ノ坂技法』で製作した製品の大半は、吟味した後にある一定の集落を経由する方法で、縄文流通のもとに各方面と搬出していったものと考えられる。

また、薄型剥片を素材とする石器群は、石核として屋内に搬入し、屋内でのⅡ次作業によって剥離され、素材として使用されるものと考えられる。この方法で加工した石器は、主に一ノ坂集落で使用したものと推測する。

次に各器種ごとに述べる。

### 〈一ノ坂技法石鎌〉

第200図で一連の形態の変容を示した。第Ⅰ段階～第Ⅳ段階までは、直接打法が主流である。第V段階から押圧剥離で整形し、完成する。

### 〈一ノ坂技法石笠〉

両面調整と片面調整の2形態がある。第200図には片面調整の例を作図した。つまみ部が整形されるのは、採集段階に近い第Ⅶ段階～第Ⅸ段階である。

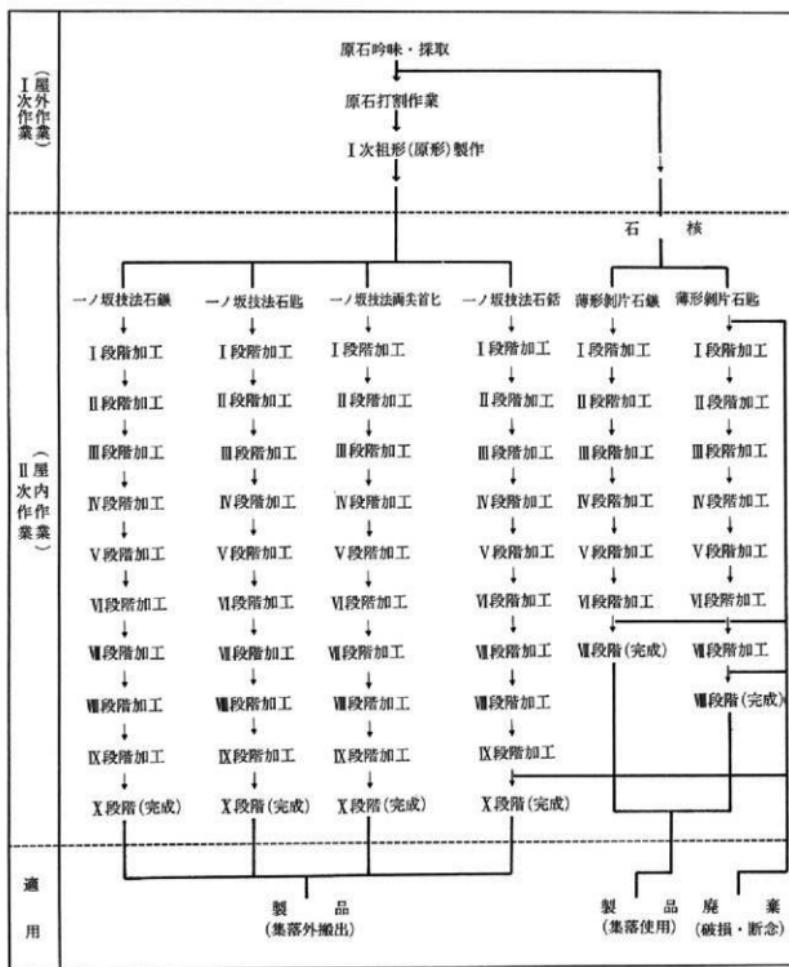
### 〈一ノ坂技法両尖匕首〉

大型で厚味を有す剥片を素材とする。第Ⅱ段階から基部はほとんど変容しない。第Ⅹ段階で押圧剥離が始まり、第X段階で尖端部を鋸歯状に整形、完成となる。形態の変容が理解できる資料が揃っている。

### 〈一ノ坂技法石鉈〉

第200図で示す製作工程を経て、製作されるものと想定される。第Ⅰ段階～第Ⅴ段階は外形上の整形、第VI段階～第VII段階は尖端部・基部の整形、第IX段階の押圧剥離で最終的な整形を施し、完成となる。

第39表 一ノ坂技法による石器製作概念表



#### 第4節 結語

一ノ坂遺跡は、石器製作を専門とする工房集落である。集落には、広場を中心とした周辺を選定して、石器製作の施設である大型住居を始め、石器の製作を行う工人らの居住施設として連房式竪穴住居跡やその後の竪穴住居群、それに、墓塚等が整然と配置されている。こうした施設の配置関係は、いわば現代の工場と宿舎の関係に近いものといえる。我国でも例のない連房式竪穴住居跡の存在は、まさに共同生活を営む工場用の宿舎そのものといって過言ではない。

石器工房となる大型住居跡は、整地過程を繰り返すごとに東側から炉跡が埋め戻され、最終的には3基に減少する。また、居住地となる連房式竪穴住居跡も構築後まもなく埋め戻され、整地の後に新たな居住地として成立する。

竪穴住居はその後、4期の変遷をたどり、立替えごとに棟数が少なくなるといった、大型住居の炉跡の減少と共に通じることも判っている。この背景には縄文社会における人口増減や経済的な影響を受けたものと推測される。

一ノ坂遺跡のような特殊集落の成立は、石器の素材となる石材が豊富といった利点も重要ではあるが、縄文社会の需要と供給に対応する分業といった社会制度が予想以上に確立していたことを示している。

製作した石器、いわば製品技術の管理は、失敗品の全てを整地層内に隠蔽することによって技術の流入を防止し、付加価値を得るといった大胆な行為とも推測される。炭化したクルミは、食料とする一方で、粉末にして住居内部に敷き詰めている。この手法はどのような意味を有するかは判然としないが、4回の整地とともに丹念に実施していることから、極めて重要な意図があつたものと理解される。

また、米沢市内の遺跡をみると、現在までに360箇所の縄文時代の遺跡が確認され、その多くは縄文前期から中期にかけて圧倒的に多い。とりわけ、石器素材の貞岩産地となる米沢東部の梓川流域と鬼面川流域は、特に顕著である。

こうしたこととは、石器製作を専門とする工房集落が一ノ坂遺跡だけに限定した特異例ではなく、ある程度の集落単位として、存在していた可能性も十分予想される。さらには、各時期を通しての一ノ坂型集落の存在も否定できない。

一ノ坂遺跡等で製作された石器（製品）は関東・中部にまで及んでいる。他に類のない豊富な原料がなせる技である。今後は、一ノ坂遺跡の保存整備を進める一方、周辺遺跡や原石周辺の遺跡の調査。製品石器の流出経路と供給地の分布範囲の解明を課題として、引き続き調査を進める所存である。

報告書抄録

ふりがな	いのせ							
書名	一ノ坂							
副書名	一ノ坂遺跡発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	米沢市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第53集							
編著者名	手塚 孝・菊地政信							
編集機関	米沢市教育委員会							
所在地	〒992 山形県米沢市金池三丁目1-55 Tel0238-22-5111							
発行年月日	西暦 1996年3月30日							
所取遺跡名	所在地	コード	北緯	東緯	調査期間	調査面積	調査原因	
		市町村	遺跡番号					
一ノ坂	山形県米沢市 矢来一丁目 1073-4号	6202	1207 (米沢市 遺跡番号 e- 147)	37度 49分 13秒	140度 4分 9秒	19890512～ 19890630  19900222～ 19900303  19900409～ 19900410  19900531～ 19900614  19901101～ 19901221  19911105～ 19911128  19921028～ 19921120  19930415～ 19930619  19940418～ 19940510	800  200  200  674  200  270  630  120	一ノ坂遺跡 「大型堅穴住居跡」周辺 の開発予定地 確認調査
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
一ノ坂	集落跡	縄文時代	堅穴住居跡	縄文土器	縄文時代前期初頭の石器工房跡である。石器工房は全長43.5mで日本最大の規模を有す。宿舎跡と推測される連房型堅穴住居跡は日本で初めて発見され、8棟で構成される。遺物も石器を中心に約220万点出土している。			

## 参考文献

1975	米沢市八幡原、埋蔵文化財調査報告書第1集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第1集	米沢市教育委員会
1976	米沢市八幡原、埋蔵文化財調査報告書第2集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第2集	米沢市教育委員会
1977	米沢市八幡原、埋蔵文化財調査報告書第3集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第3集	米沢市教育委員会
1977	松原、松原遺跡第1地点の発掘調査報告書	置賜考古学会
1981	庚甲町遺跡、発掘調査報告書第1集	大石田町教育委員会
1982	庚甲町遺跡、発掘調査報告書第2集	大石田町教育委員会
1982	米沢市桑山地内団地造成、埋蔵文化財調査報告書第1集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第6集	米沢市教育委員会
1983	米沢市桑山地内団地造成、埋蔵文化財調査報告書第2集 米沢市埋蔵文化財調査報告書第8集	米沢市教育委員会
1985	法将寺遺跡、発掘調査報告書	米沢市教育委員会
1990	米沢市埋蔵文化財調査報告書第12集 遺跡詳細分布調査報告書第3集 18頁～25頁	米沢市教育委員会
1991	米沢市埋蔵文化財調査報告書第27集 一ノ坂遺跡発掘調査概報第1集	米沢市教育委員会
1992	米沢市埋蔵文化財調査報告書第30集 一ノ坂遺跡発掘調査概報第2集	米沢市教育委員会
1993	米沢市埋蔵文化財調査報告書第35集 一ノ坂遺跡発掘調査概報第3集	米沢市教育委員会
1994	米沢市埋蔵文化財調査報告書第38集 一ノ坂遺跡発掘調査概報第4集	米沢市教育委員会
1994	米沢市埋蔵文化財調査報告書第40集 窟平遺跡、第I次・第II次発掘調査報告書	米沢市教育委員会
1994	米沢市埋蔵文化財調査報告書第46集 塔之原遺跡発掘調査報告書	米沢市教育委員会
1995	米沢市埋蔵文化財調査報告書第43集 一ノ坂遺跡発掘調査概報第5集	米沢市教育委員会
	米沢市埋蔵文化財調査報告書第48集	米沢市教育委員会

米沢市埋蔵文化財調査報告書 第53集

### 一ノ坂遺跡発掘調査報告書

〈本文・挿図編〉

平成8年3月25日 印刷

平成8年3月31日 発行

発行 米沢市教育委員会  
米沢市金池三丁目1-55  
TEL 0238(22)5111 内線7504

印刷 株式会社 羽陽印刷  
米沢市中央三丁目9-22  
TEL 0238(23)0467